聖徒の道 1988年4月20日発行（毎月1回20日発行）第32巻第4号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

1988
4

聖徒の道

末日聖徒イエス・キリスト教会

聖徒の道 1988年4月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した，末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本書は以下の言語で出版されています。月刊――イタリア語，英語，オランダ語，サモア語，スウェーデン語，スペイン語，中国語，韓国語，デンマーク語，ドイツ語，トンガ語，日本語，フィンランド語，フランス語，ポルトガル語，ノルウェー語。隔月刊――インドネシア語，タイ語，タヒチ語。季刊――アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン，ゴードン・B・ヒンクレー，トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：マリオン・G・ロムニー，ハワード・W・ハンター，ボイド・K・パッカー，マービン・J・アシュトン，L・トム・ペリー，デビッド・B・ヘイト，ジェームズ・E・ファウスト，ニール・A・マックスウェル，ラッセル・M・ネルソン，ダリン・H・オークス，M・ラッセル・バラード，ジョセフ・B・ワースリン
顧問：ヒュー・W・ピノック，ジーン・R・クック，ウィリアム・R・ブラッドフォード，キース・W・ウィルコックス
編集長：ヒュー・W・ピノック
教会機関誌ディレクター：ロナルド・L・ナイトン
編集主幹：ラリー・A・ヒラー
編集副主幹：デビッド・ミッチェル，ジャン・U・ピンボロー
編集主幹補佐：アン・レムリン
子供の頁編集：ダイアン・ブリンクマン
レイアウト／デザイン：N・ケイ・スティーブンソン，シャリ・クック
制作：レジナルド・J・クリステンセン
マーケティング・マネージャー：トーマス・L・ピーターソン

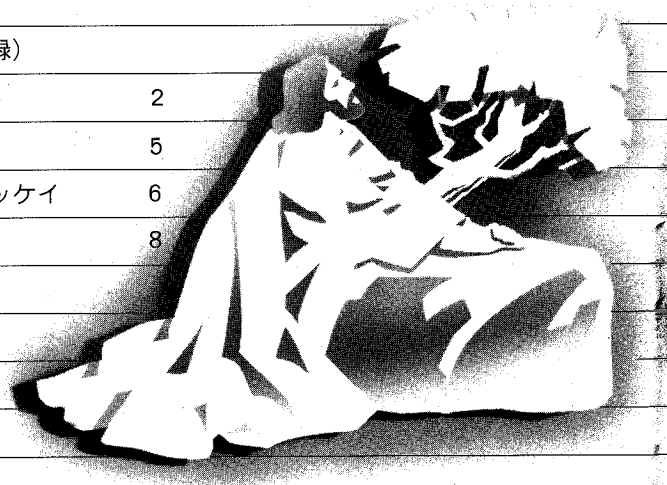
聖徒の道　1988年4月号第32巻第4号
発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106東京都港区南麻布5-10-30
電話　03-440-2351
印刷所　株式会社　精興社
定　価　年間予約／海外予約2,200円(送料共)
半年予約1,100円(送料共)
普通号150円，大会号(1，7月号)350円
International Magazines PBMA 8804JA
Printed in Tokyo, Japan.
Copyright © 1988 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.
●定期購読は，「聖徒の道予約申し込み用紙」でお申し込みになるか，または現金書留か郵便振替（口座名／末日聖徒イエス・キリスト教会　振替口座番号／東京0-41512）にて管理本部経理課へご送金いただければ，直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布５－10－30管理本部経理課☎03-440-2351（代表）●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒194東京都町田市小川1704-1／末日聖徒イエス・キリスト教会　資材管理部配送センター☎0427-96-2820

Published monthly by the Corporation of the President of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. Application to mail at second class postage rates is pending at Salt Lake City, Utah. Subscription price $9.00 a year. $1.00 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, United States of America. Subscription information telephone number 801-531-2947.

POSTMASTER: Send form 3579 to "Seito no Michi" at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, United States of America.

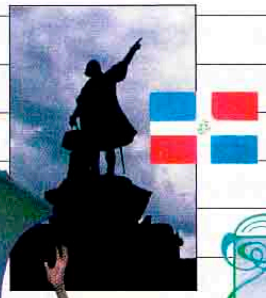
●――もくじ

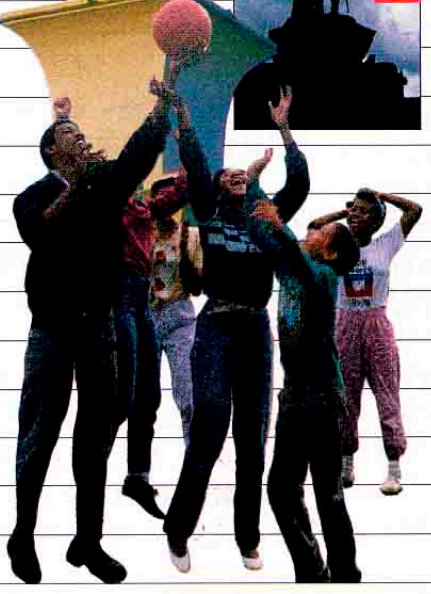
主は生けりと知る	トーマス・S・モンソン	2
すべてを失いかけた人	エイリーン・ナイトン	7
愛ある奉仕	セルマ・ウィリアムズ	9
贖罪――癒しの力	エドウィン・W・アルダス	10
モルモン経を友として	苅田恭子	13
家庭訪問メッセージ		
「愛は……不作法をしない」		15
結婚生活にみたまを求める	テレンス・D・オルソン	16
1019号棟の祈り	ジョン・B・フィッシュ	20
リチャード・カーワン――慧眼の人	シンシア・ガードナー	23
ライラックの茂み	ゲリー・ウォルトン	25
苦しみの中からの成長		27
質疑応答		
地球の歴史	モーリス・S・ピーターソン	29
他の宗教とのかかわり方	R・ラニエル・プリッチ	
祝福師の祝福		33
人々が怖れおののくとき	ロイデン・G・デリック	41
――若人のために――		
誰を恐れるの？	キャサリン・リューベック	36
約　束	デビア・ハリス	38
バケツの水	スー・ドレイパー	44
信仰の国――ドミニカ共和国	ライザ・A・ジョンソン	46
各地のたより		
子供のページ（別冊付録）		
ハンス		2
リムハイの民の脱出		5
ジャネット・エバンズ・マッケイ		6
永遠のあなた		8

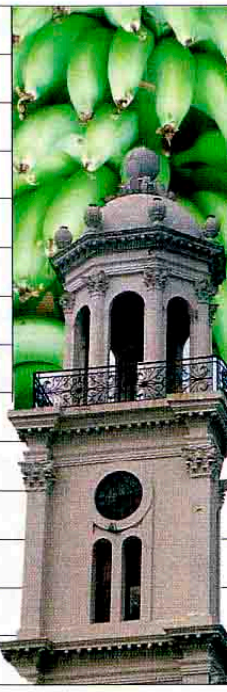


モルモン経

表紙：ハリー・アンダーソン画
「昇天」







主は生けりと知る

第二副管長
トーマス・S・モンソン

アイダホ州フランクリンの町にも再び春がめぐってきました。こまどりが心地よいさえずりを聞かせ，スイセンの花が美しい姿を見せ始めました。草や木も冬のくすんだ世界から，一夜のうちに萌え出したかのようです。間もなく，畑を耕し，種をまき，新たな生命の循環の始まるときがやって来ます。人々のざわめきを離れた山すそには，墓地が静かなたたずまいを見せています。

ある春の日，この墓地に小さなひつぎが納められました。墓石には次のように文字が彫られています。

マイケル・ポール・シャムウェイ
誕生：1965年10月24日
死亡：1966年３月14日

ここでシャムウェイ家の人々について話したいと思います。彼らは今ソルトレークシティーの私の家の近くに住んでいます。マーク・シャムウェイとウィルマ・シャムウェイ夫妻，そしてその子供たちはいつも愛想よく私たちに挨拶をしてくれます。彼らは周囲の人々の気持ちを明るくしてくれる，すばらしい人々です。

あの年の10月24日，マイケルが生まれたときに，シャムウェイ家の人々がどれほど大きな喜びを感じたか想像がつくでしょうか。父親はマイケルの誕生を誇らしく思いました。そして，地上で成長するために神のみもとから送られてきた新しい生命を迎えて，兄や姉は胸を高鳴らせ，母親はへりくだった思いに満たされたのです。こうして幸せな

日々が数カ月続きました。

ところが，３月のあの運命的な夜に，幼いマイケルの息は絶え，彼は天上の家に召されたのです。大切な子供を失ったマークとウィルマは悲しみに打ちひしがれてしまいました。確かにその悲しみは彼らにとってたとえようのないものでした。しかし，愛する者を失う悲しみは，すべての人が味わうものです。親，兄弟，子供を失った人は数多くいます。

物事を深く考える人ならだれでも，いにしえのヨブのように自問するはずです。「人がもし死ねば，また生きるでしょうか。」（ヨブ14：14）それは忘れようとして忘れられる疑問ではありません。死はすべての人にやって来るのです。死は，たどたどしい足取りで歩く老人の上に影を落とし，その足音はようやく人生の中ほどに差しかかった人々の耳にも聞こえてきます。そして，小さな子供たちの陽気な笑い声を止めることさえよくあるのです。

死を避けることはできません。しかし私たちは生命，すなわち永遠の生命について学ぶとき，最もよく死を理解することができるようになります。

私たちの存在は，この世への誕生をもって始まったものではありません。詩人ウィリアム・ワーズワースは次のように書いています。

「われらの誕生は，ただ眠りと前世の忘却とにすぎず。
われらと共に昇りし魂，生命の星は，
かつていずこにか沈みて，
はるかより来たれり。
すぎ去りし昔を忘れしにはあらず，
また赤裸にて来たりしにもあらず，
栄光の雲を曳きつつ
われらの故郷なる神のもとより来たりぬ。」
（『幼年時代を追想して不死を知る頌』岩波文庫「ワーズワース詩集」）

この地球は，人が住む所として，神の知恵によって創造されました。創世記には，地は形なく，むなしく，やみが淵のおもてにあったと書かれています。神が「光あれ」と言われると，光がありました。そして，「おおぞらあれ」と言われると，おおぞらがあり，「地は青草をはえさせよ」との言葉があると，青草がはえてきたのです。神はまた空の鳥，水に群がる生き物，地の獣とを造られました。（創世１章参照）

次に神は人をご自身の形にかたどって創造し，男と女とに創造されました。人間には，すべての生き物に対する統治権が与えられました。地球は私たちの試しの場となり，必要な経験を積む場となったのです。

私たちはこの人生で，泣き，笑い，働き，遊び，愛して日々を送り，やがて死を迎えます。もしあのお方，すなわちナザレのイエスの働きがなければ，死はいつまでも私たちの上に重くのしかかっていたことでしょう。イエスは，家畜小屋で生まれ，飼い葉おけに寝かされました。その誕生は多くの予言者たちの予言を成就するものでした。神ご自身から教えを受けたイエスは，その命を捧げ，光となり，道を示されました。人々は群れをなしてイエスのあとに従いました。イエスは子供たちにも慕われましたが，誇り高ぶる人々からは拒まれました。イエスはたとえを用い，模範によって教えられました。そして，完全な生涯を送られたのです。イエスのみ業を通して，目の見えない人々が光を取り戻し，耳の聞こえない人たちが聞こえるようになり，

歩けなかった人々が自分の足で歩けるようになりました。

しかし，王の王，主の主として来られたこのお方は，敵や反逆者と同様の扱いをされ，裁判とは名ばかりのあざけりを受けました。「十字架につけよ，十字架につけよ」（ヨハネ19：6）との叫びが夜のしじまに響き，やがて人々はカルバリへと進み始めました。

イエスはなぶりものにされ，ののしりやあざけり，侮りを受けました。そして，「イスラエルの王キリスト，いま十字架からおりてみるがよい。それを見たら信じよう。」（マルコ15：32）また，「他人を救ったが，自分自身を救うことができない。」（マタイ27：42）「あなたはキリストではないか。それなら，自分を……救ってみよ」（ルカ23：39）という罵倒の中で，釘で十字架に打ちつけられたのです。そのあざけりにイエスはこう答えられました。「父よ，彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか，わからずにいるのです。」（ルカ23：34）

イエスはやがて息絶え，その遺骸は心やさしい友と家族の手によって墓に葬られました。

その週の初めの日の朝早く，マグダラのマリヤともうひとりのマリヤが墓の所へ来ました。ところが，驚いたことに，主の体は姿を消していました。ルカは輝く衣を着たふたりの人がそこに立っていて，こう話したと記しています。「あなたがたは，なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。

そのかたは，ここにはおられない。よみがえられたのだ。」（ルカ24：5－6）「人がもし死ねば，また生きるでしょうか」とのヨブの疑問に対する答えが与えられたのです。

聖典には主の昇栄の後にあった出来事も書かれています。残酷な方法で殺され，殉教者となったステパノは天を見上げ，こう叫びました。「ああ，天が開けて，人の子が神の右に立っておいでになるのが見える。」（使徒7：56）サウロはダマスコへ向かう途中で，復活し，昇栄したキリストの示現を受けました。そしてペテロとヨハネとヤコブもよみがえったキリストを証しています。

パウロがコリントの聖徒たちに書き送った熱烈な証を読んで，心を鼓舞されないような人がいるでしょうか。彼はこう宣言しています。「キリストが，聖書に書いてあるとおり，わたしたちの罪のために死んだこと，そして葬られたこと，聖書に書いてあるとおり，三日目によみがえったこと，ケパに現れ，次に，十二人に現れたことである。

そののち，五百人以上の兄弟たちに，同時に現れた。その……大多数はいまなお生存している。

そののち，ヤコブに現れ，次に，すべての使徒たちに現れ，そして最後に，……わたしにも，現れたのである。」（Ⅰコリント15：3－8）

永遠の父なる神は，アメリカ大陸の群衆に語りかけ，こう言われました。「『わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け。』……

群衆はその意味が解ってまた天を仰ぐと，天から一人の男の方が降りたもうのが見えた。……そのお方は手を伸して群衆に話しかけて仰せになった。

『見よ，われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。

われは世の光にしてまた世の生命なり。われは御父がわれに授けたまいしかの苦き杯をすでに飲み，世の人の罪をわが身に引き受けて御父の栄光を示したり。……わが手足

にある釘あとに触れて，われがイスラエルの神にして全世界の神なること，またわれが世の人の罪を負うて一度(ひとたび)殺されたるを知るために起(た)ちてわれに近づけ』と。

人は各々みな近よって親しくこれを見，親しくこれに触れたからみな一せいによばわって，『ホザナよ。いと高き神の御名を讃美す』と言い，イエスの足下にひれ伏してイエスを拝した。」(IIIニーファイ11：7－11，14，16－17)

十字架につけられ，後によみがえった御子を人々に紹介されたこの慈愛あふれる神は，人間が勝手に作り出した教えとはまったく異なり，肉体を持ち，感情を持ったお方でした。父なる神は，私たちの祈りを聞く耳と行ないを見る目を持ち，私たちに語りかけるための口を持っておられるのです。そして，愛と慈悲に満ちた心をも持っておられます。神は実在のお方です。神は生きておられます。私たちは神の形にかたどってつくられた，神の子供なのです。したがって，私たちは神に似た存在であり，神も私たちに似たお方であると言うことができるのです。この神こそ，独り子を賜わるほどに，この世を愛してくださったお方なのです。

神はシャムウェイ夫妻をはじめ，愛する者を失ったすべての人に，「主が与え，主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」(ヨブ1：21)という勇気を与えてくださいます。皆さんが，すでに死の縄目が断ち切られていること，またたとえ今は死によって離されていても，やがて家族がひとつになり，共に永遠の生命の祝福にあずかるときが来ることを心に強く留められるように願っています。

私は特別な証し人として，全心全霊を尽くして，神が生きてましますことを証します。イエスは神の御子であり，肉における御父の独り子です。また，イエスは私たちの贖い主であり，神と人との仲保者たるお方です。イエスこそ，私たちの罪を贖うために，十字架の上で息を引きとられたお方であり，復活の初穂となられたお方なのです。「主は生けりと知る」，なんと甘美な言葉ではないでしょうか。□

ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに，以下の点について話し合うとよいでしょう。

1．私たちは永遠の生命について学ぶときに，最もよく死を理解できるようになる。
2．イエス・キリストは私たちの贖い主である。キリストは私たちの罪を贖うために，十字架の上で命を捨てられた。
3．イエス・キリストの復活によって，いつか私たちはすでにこの世を去った愛する人々と，ひとつに結び合わされる。

話し合いを進めるために

1．イエス・キリストの復活の証として何が与えられているだろうか。
2．4月に祝う復活祭は，イエス・キリストの死と復活を記念する行事である。復活祭を祝う適切な方法として，どのようなことがあげられるだろうか。次のようなことが考えられる。
   a．キリストの死と復活について聖典から読む。
   b．愛する人々が葬られている墓地を訪ねる。
   c．特別な家庭の夕べを開き，話し合い，証を述べる。

すべてを失いかけた人

家族も仕事も家もない彼を，
私は不思議に思いました。

エイリーン・ナイトン

私が物静かな中年の男性フランクに出会ったのは，ソルトレークシティーの市立病院で看護婦として働いていたときでした。彼は左足の血液の循環が悪く，検査のために病院に運ばれてきたのです。数日間にわたる検査の後，病状はさらに悪化しました。足をひざ下から切断するということで医師たちの診断が下され，手術が行なわれました。

それから何日か経過しましたが私は勤務中，フランクを訪ねてくる人がひとりもいないことに気づきました。家族や友人からの電話も手紙も何ひとつ来ないのです。

あまりにも孤独そうな彼を見て不思議に思い，私は病院の記録を調べてみました。しかしそこには住所は載っていません。彼は安住の地を持たずに，国中を巡り歩いている放浪者で，ただひとり，テキサス州にいる姉の名前だけが近親者として記録されていました。

それ以上詳しく知っている看護婦はほかにだれもいませんでした。そこである日，私は彼に話しかけてみることにしました。

髪を乱したまま，彼はいつもどおり，静かに体を横たえていました。楽な姿勢をとろうとして苦痛に眉をしかめています。私はそれを見て，声をかけました。

「どうかしましたか。」

「この足の下に枕を置いてもらえませんか。」そう言って彼はもものところを指差しました。「どうやっても落ち着かないんです。こんなに痛むものなんでしょうか。痛み止めの注射はまだでしょうかね。」

「ええ，さっきしたばかりですからね。お水でも入れましょうか。」私はそう言って，水差しからコップに水を注ぎました。そしてこう尋ねました。「お住まいはこの近くですか。」

「いや，違いますよ。ネバダ州での仕事を終えて別の仕事を探しに行く途中，ここを通ってね。モンタナ州に行くところだったんですよ。」

「まあ，それじゃモンタナ州に家族がいらっしゃるのね。」

「いや，家族はいない。」きっぱりとした彼の声が部屋中にこだましたように聞こえました。「死んだんですよ。」

彼は襲ってくる痛みのために，もものあたりをつかみながらもう一度私の方を見上げました。私は彼の肩に手を置き，そばに立って痛みが治まるのを待ちました。

「交通事故でね。妻と5人の子供を亡くしたんですよ。」そう彼はつけ加えました。

その後，ナースステーションに戻ってから，私はこの男性が失ったものに思いをめぐらしました。彼は家族を失い，そして今また片足を失ったのです。しかも力づけてくれる家族も友人もいない見知

らぬ町で……。

私はフランクの境遇を同僚の看護婦たちに話し，私たちが彼の友達に，そして家族になってあげることに決めました。私たちは，彼がその事故以来町を転々とし，しばらく働いてはまた別の町へ移って，自分が失ったものに代わる何かを求めて旅を続けていたことを知りました。

しかし，求めているものは見つかりませんでした。彼は愛することを，そしてその愛が再び奪われてしまうことを恐れていたのです。

看護婦たちはそれぞれにフランクのことを考えて行動するようになりました。彼が西部劇が好きなことを知ったある看護婦は，彼のそばに西部劇の本がいつも置かれているように常に気を配りました。またある看護婦は，自宅の庭から取ってきた花を彼のベッドのわきに飾るようにしました。また，好物を持ってきてあげた看護婦もいます。

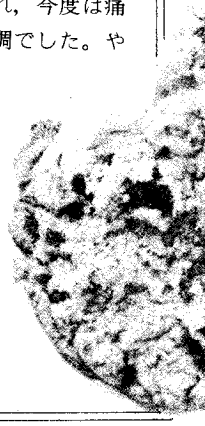
フランクの隣のベッドの患者の家族もこれに加わってくれました。このパーカー家族がフランクのために持ってきた贈り物に，私は深く心を打たれました。彼らは，フランクに自分の家族の写真を贈ったのです。彼はそれをとても大事にして，いつも見えるところに置いていました。

「パーカーさんたちは，私に家族がいないことを知って，彼らの家族の一員であるという気持ちを私に持たせてくれたんです。ありがたいことです。彼らの子供たちの写真を見るのがとても楽しみでね。」そう言いながらフランクは子供たち一人一人を指差しながら，まるで自分の子供のように誇らしげに名前を言うのです。

その後少しして，フランクの極端な足の痛みは治癒の過程で余病を併発したためであることがわかりました。これを治すには，フランクはもう一度手術を受けなければなりませんでした。それは左足をさらにひざの上まで切断するというものでした。フランクにとってそれは恐ろしいことでした。彼は痛み止めの注射を要求する以外，私たちと話そうともしなくなってしまいました。

予定されていた手術日の前の晩，フランクはベッドを抜け出し，病室の床をはって窓のところへ体を引きずっていき，窓の一番下の掛け金をはずしました。彼は3階にあるその病室から飛び降りてすべてを終わりにしようとしたのです。足の痛みも心の痛みも寂しさも，感じなくて済むように……。しかし，彼は窓を開けることができませんでした。絶望と苦悩の果てにフランクは床に身を崩し，その場に横たわったまま泣き続けていました。

手術は計画どおり行なわれ，今度は痛みも和らぎ術後の快復も順調でした。や



っと快復に向かい始めたフランクに，私たちは皆ほっと胸をなでおろしたのでした。

その後，パーカー夫妻が宣教師と連絡を取り，フランクも彼らの伝えるメッセージに非常に興味を示しました。すばらしいことに，パーカー夫妻は退院したフランクを家に引き取ることにしたのです。足が癒えるのを待って，彼はバプテスマを受けました。彼は今，新たな気持ちで人生に取り組もうとしています。そして死別した妻や５人の子供たちと結び固められる日を心待ちにしています。

私自身もこの経験から大切な教訓を得ました。フランクのために私にできたことは何だったのでしょうか。実は，私は彼にモルモン経を渡そうと思っていたのです。しかし病院のロッカーまでモルモン経を持ってきていながら，そこに置いたままにしていました。あとになって，私は恥ずかしい気持ちでロッカーの中のモルモン経のことをフランクに話しました。フランクは笑いながら私の話を聞いてくれました。そして冗談ぽく，二度とみたまの勧めを無視しないようにと私に言いました。

私も今後二度とそのようなことがないようにするつもりです。□

愛ある奉仕

セルマ・ウィリアムズ

私の主人は突然脳卒中で倒れ，私が一日中つきっきりで面倒を見なければならない状態になってしまいました。

普通，愛の奉仕というとやさしい姉妹たちの働きが真っ先に頭に浮かんできます。しかし，私たちの家族は，これまでワード部の大祭司の方々から本当に大きな愛をいただいてきました。

ある日のこと，私の主人は突然脳卒中で倒れ，左半身不随になってしまいました。２カ月半の入院生活から家に戻ってきたときには，私が一日中つきっきりで面倒を見なければならない状態になっていました。遠くに住んでいる子供たちは，電話をくれたり，手紙をくれたりして，やさしい励ましの言葉をかけてくれましたが，実際に私たちの所へ来て主人の面倒をみる手伝いをすることは，とてもできない相談でした。

主人が病院から帰った翌日に，ホームティーチャーのクリフ・バートン兄弟がいらして，ワード部の大祭司たちで手伝えることはないかと尋ねてくださいました。そこで話し合った結果，私が毎週２，３時間家を空けて自由な時間を持つことが，主人にとっても私自身にとっても最良の治療になるだろうということになりました。

そのときから，大祭司の方たちが毎週我が家を訪れて，主人と2,3時間ずつ過ごしてくださっています。皆さんは雑誌の記事やおもしろい物語などについて話したりして，楽しい時間を持ち，知的にも霊的にも良い刺激を与えてくださっています。

以前はよく知らなかった人たちとも，この貴い奉仕を通して，親しい友人になることができました。毎月第１月曜日には必ずバートン兄弟から電話がかかってきます。私の１カ月の予定を尋ねて，訪問の調整をしてくださるのです。

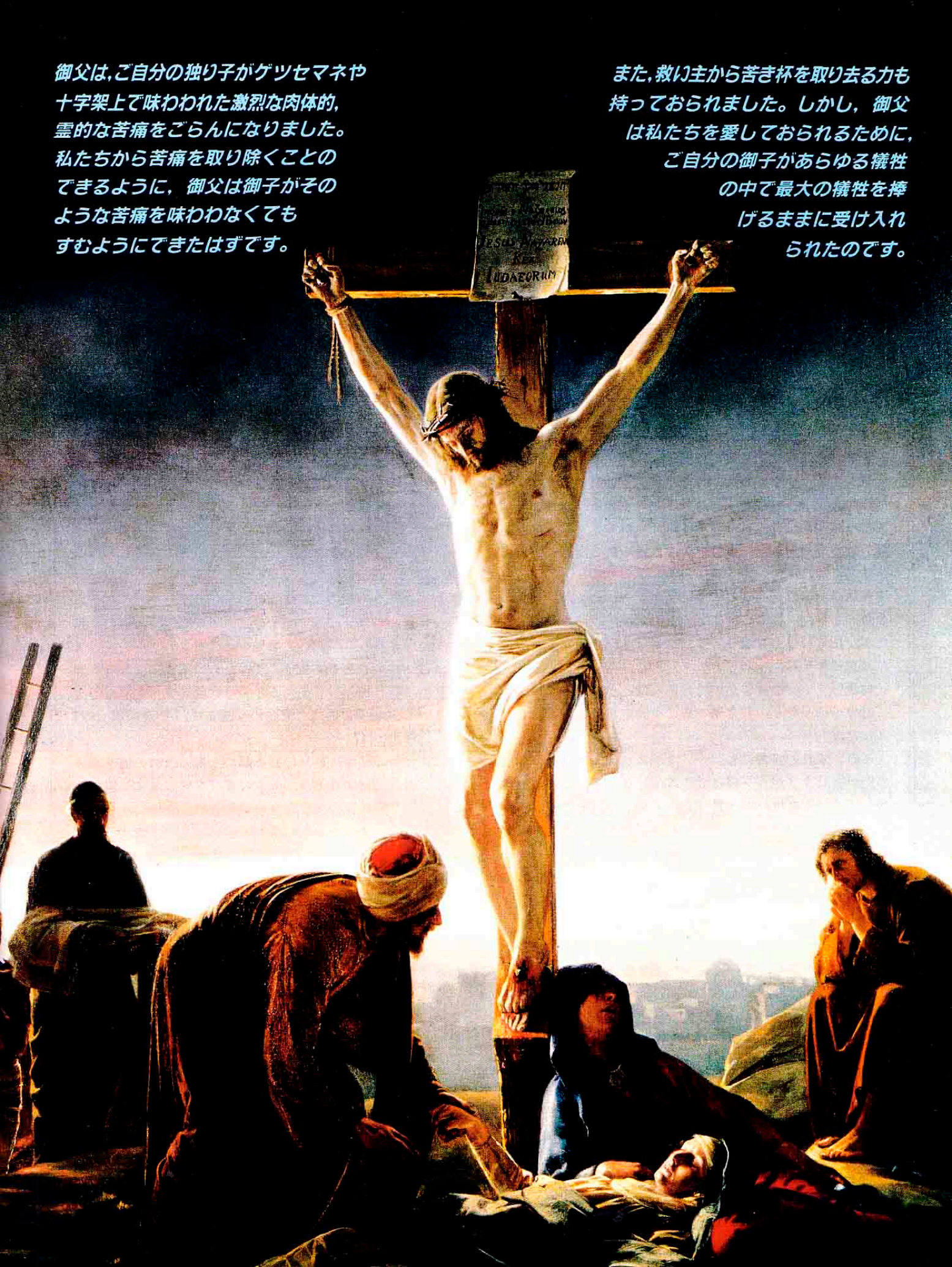
この人たちは皆，すばらしい人たちで，思いやりとやさしさにあふれています。その心温まる訪問のおかげで，長く寒い冬もそれほどつらく感じることなく，憂うつな日々も明るくなり，太陽の光がなお一層輝きに満ちて感じられるようになりました。

私たちのワード部には，奉仕のすべてを知っているこのようなすばらしい兄弟たちがいるのです。□

＊セルマ・ウィリアムズ：ユタ州プロボ・オークヒルステーキ部オークヒル第４ワード部扶助協会の音楽指揮者。

贖罪——癒しの力

エドウィン・W・アルダス



御父は，ご自分の独り子がゲツセマネや十字架上で味わわれた激烈な肉体的，霊的な苦痛をごらんになりました。私たちから苦痛を取り除くことのできるように，御父は御子がそのような苦痛を味わわなくてもすむようにできたはずです。

また，救い主から苦き杯を取り去る力も持っておられました。しかし，御父は私たちを愛しておられるために，ご自分の御子があらゆる犠牲の中で最大の犠牲を捧げるままに受け入れられたのです。

苦痛を取り去ることのできない無力感を感じながら，愛する人が苦しむ姿を見守った経験があるでしょうか。私は医師として，そのような状況に置かれた両親に同伴することがしばしばありました。彼らは為すすべもないまま，子供の痛みと苦痛を和らげるために何かをしたいと願っているのです。

ある日の夜中の3時ごろ，3歳のモニークが病院の救急室に運び込まれてきました。抗生物質を注射し，入院の手続きを取り，手術が必要のようでした。ところが抗生物質の注射に1時間以上もかかったのです。血管が細くその皮膜が薄いせいでした。看護婦たちは，注入に耐えられる太く強い血管を見つけるために彼女の血管に何度も針を刺さなければなりませんでした。

8歳のトムは交通事故に遭い，頬骨を折って，目に重傷を負いました。彼はこれまでに2度の手術に耐えてきましたが，正常な視力を取り戻すにはあと2回手術を受けなければなりません。

13歳のフランクはほかの男の子とけんかをし，運悪くあごの骨を折って6週間金属であごを固定されることになりました。

このいずれの場合にも，――ほかにも数えきれないほどの例がありますが――親はできることなら子供の苦痛を代わって受けてあげたいと思うことでしょう。その苦痛が本人の不注意や不従順，不可抗力のいずれから起きたものであろうと関係ありません。しかし親として為すすべはなく，ときには子供の苦痛に耐える姿を直視するのはあまりにも過酷であるために，部屋から出されることもあります。

しかし，肉体の苦痛よりもっとひどい苦痛があります。それは霊の苦痛です。霊の苦痛は一時的なものと違って永く続くことがあり，霊の死をもたらす場合もあります。

しかし幸いにも，私たちには別の親がいます。肉体と霊の苦痛を取り除いてくださる天の御父です。私たちはイエス・キリストの贖いを通して肉体の死から復活し，悔い改めることによって霊の苦痛や死から贖われます。

御父は，ご自分の独り子がゲツセマネや十字架上で味わわれた激烈な肉体的，霊的な苦痛をご覧になりました。私たちから苦痛を取り除くことができるように，御父は御子がそのような苦痛を味わわなくてもすむようにできたはずです。また，救い主から苦き杯（マタイ26：39；教義と聖約19：18参照）を取り去る力も持っておられました。しかし，御父は私たちを愛しておられるために，ご自分の御子があらゆる犠牲の中で最大の犠牲を捧げるままに受け入れられたのです。

メルビン・J・バラード長老の言葉に次のような一節があります。「その瞬間にも御父は御子を救えたはずである。私は私たちをお見捨てにはならなかったことを天父に感謝し，天父を賛美したい。天父が心に抱いておられたのは御子への愛だけではない。私たちをも天父は愛しておられたのである。私は天父がこの業を途中でやめられなかったことを心から感謝したい。天父は私たちを愛しておられるがゆえに，御子が苦しみに遭われるのをじっと耐えておられたのである。そしてついに御子は私たちの救い主，贖い主となられた。もしも御子がおられなかったならば，御子の犠牲がなかったならば，私たちは地に葬られ，決して栄光を受けて主のみ前に戻ることはできなかったであろう。このために天父は御子を人間のために贈り物として与えるという代価を支払われたのである。」（『逸話集，近代の使途の生涯より』「聖徒の道」1974年12月号，p.547）

監督として私は，自分の罪を認め，悔い改めの道を歩み始めた会員に接するとき，大きな喜びを感じます。監督として彼らと共に罪の悲しみを分かち合い，一緒に涙を流し，そして贖罪によってもたらされる赦しについて考えるのは，監督が味わうことのできる最もすばらしい経験のひとつです。

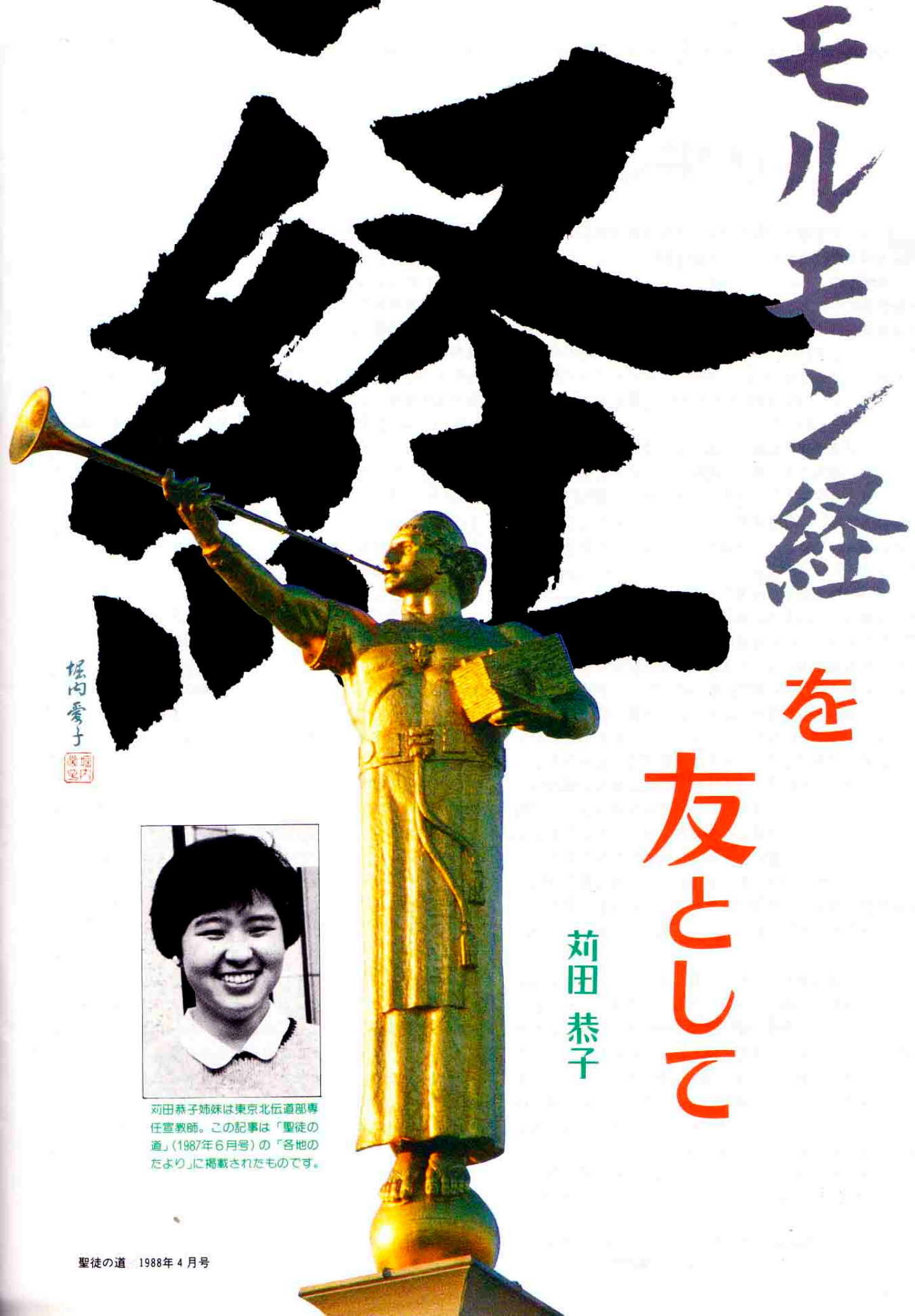
贖いによる癒しの力を目撃することは，すなわち福音の神髄を目の当たりにするのと等しい経験と言えます。この贖いは私たちすべてに与えられているものです。私たちはひとり残らず悔い改める必要があります。私たちは救い主を通してのみ罪や苦痛を取り除き，御父のようになることができるのです。

贖いは私たちに大きな希望を与えてくれます。私たちの重荷をみずから引き受けてくださる――事実すでに引き受けてくださっているのですが――救い主がおられるということはすばらしい祝福です。人を癒すために御子を遣わしてくださった天の父に私たちは心から感謝しています。□

＊エドウィン・W・アルダス：医師。ユタ州ソルトレークワサッチステーキ部バトラー第16ワード部監督。

モルモン経を友として

苅田 恭子



苅田恭子姉妹は東京北伝道部専任宣教師。この記事は「聖徒の道」(1987年6月号)の「各地のたより」に掲載されたものです。

私は小学生のころからいろいろな宗教に関心があり，様々な教会に行ったりお話を聞いたりしていました。特に中学生のころには，ジョセフ・スミスのように神様の教会がどこかにあるはずだと探し求め，そこへ導かれるように祈り求めていました。ある日，放課後の教室に昔の友人がぶらっと現われ，そのとき彼が手にしていたのがモルモン経だったのです。表紙の，ラッパを吹くモロナイの絵柄に心をひかれ，「それは何の本ですか」と尋ねたのがこの教会を知るきっかけでした。

多くの兄弟姉妹と同様に，私にとってモルモン経はかけがえのない書物です。単に一書物としての存在を超えて，私に大きな力を与えてくれる本です。近くへ買物に行くときも必ず手にして行きます。もともとは，いつでもどこでも読めるようにと持ち歩き始めたのですが，そのうちにすばらしいことに気づきました。

ひとたび外に出ると大勢の人がいて，いつ，どこでみ言葉を必要としている人にお会いできるかわかりません。以前の私がそうだったように……。

たまたまお友達になった人が福音を必要とされていることがあります。また突然，話しかけたほうがよいという強いみたまの促しを受け，話しかける言葉を祈り求めてから声をかけることも少なくありません。けれども自分のモルモン経には愛着があり，それを手放すことはできませんでしたので，どなたかに差し上げるためにもう1冊持つことにしました。しかしそのうち1冊では足りないことが増えてきましたので，予備に2冊は持ち歩くようにしました。かわいいバッグを小脇にかかえているような女の子でいてほしいという母の望みを振り切って……。肩の重みは私が末日聖徒であることを強く認識させてくれます。疲れているときは少しでも早く軽くしようと思うので伝道もはかどります。

モルモン経を私がどんなに大切に思っているかということや，だれかにお渡しできるのが喜びであることをお話しすると，大抵の方が受け取ってくださいます。すぐにお読みにならないかもしれません。しかしいつの日か，その方が一体自分が何者で，人生の目的は何であるのか，行く末はどうなるのかについて考えられるとき，モルモン経に再び目をとめ，証したことを思い出してくださるかもしれません。そして，モルモン経がイエス・キリストについてのもうひとつの証であり，キリストの教えと救いの計画と天父の愛が記されていることを知ったとき，そのときどんなお顔をされるだろうかといつも想像しながらお渡しします。それはその方にとって永遠の行く末を決める大切な一瞬なのかもしれないのです。

ときどき渋谷ブックセンターに10冊まとめて買いに行きますが，その帰りに大抵どなたかが大きな荷物を見て「お持ちしましょう」と言ってくださいます。私はそのたびにお礼としてモルモン経を1冊プレゼントしますが，同時にこの本が神様からのもので，私たちにとってどんなに大切なものであるかという証を添えてお渡しします。それを横でご覧になっていた方が，「次は私がお持ちします」と言ってくださったこともありました。

私は勉強用のモルモン経を抱いて眠ります。不安な夜にも平安に包まれて休むことができます。モルモン経と一緒にいるだけで祝福が大きいのですから読むときにはなおさらです。祈りの答えもモルモン経から受けることが多くあります。

日々の生活の中で自分の高慢さを感じて苦しいときにはベンジャミン王が(モーサヤ2：20－22，24－26)，自分の弱さに苦しむときにはモロナイとニーファイが（イテル12：27，IIニーファイ4：17－35)，ためらうときにはニーファイが(Iニーファイ3：7)，証を伝えるのに臆するときは命をかけて証し続けたアビナダイが語りかけてくれます。

また友人，家族にも見捨てられ，財産を捨てたアミュレク(アルマ15：16)，二千人の若者の勇気(アルマ57：19－21)，深い悔い改めと同胞への愛を示したアンタイ・ニーファイ・リーハイ人（アルマ24)，アルマやアンモン，またアロンやムロカイなどのすばらしい宣教師たち，ジェレドの兄弟の謙遜さと深い信仰，一国の王でありながら子供のように純真なラモーナイ王，確固たる信仰と勇気の人である戦うモロナイ，レーマン人の予言者サムエル。クモラの丘での大戦争で生き残ったモロナイはたったひとりで何を思っただろうかと考えます。ひとり土の中にモルモン経を埋めたときの彼の思い，必死に金版を守り抜いたジョセフ・スミスの思い，そしてその記録を私たちに与えてくださった神様の愛を思うとき，モルモン経を友とできる喜びと特権を強く感じます。

モルモン経は真実であり，私たちが忠実であれば，いつの日かモルモン経の著者たちにもお会いできることを証します。□

家庭訪問メッセージ

「愛は……不作法をしない」

（Ⅰコリント13:4-5）

目的：イエス・キリストの福音に従うという点において，積極的な模範を示す。

「わたしについてきなさい」というイエスの言葉を聞くと，ペテロと呼ばれたシモンとアンデレは網を捨てて，イエスに従いました。（マタイ4：18－20参照）キリストの弟子となったこの謙遜な漁師たちと同じように，私たちもイエスに従おうと努力しています。イエスは奇跡を行ない，完全な模範を示すとともに，贖いと復活を通して，私たちが不死不滅と永遠の生命を受けられるようにしてくださいました。

キリストは，「もしあなたがたがわたしを愛するならば，わたしのいましめを守るべきである」（ヨハネ14：15），「互に愛し合うならば，それによって，あなたがたがわたしの弟子であることを，すべての者が認めるであろう」（ヨハネ13：35）と言っておられます。それでは，私たちはどうしたらイエスに対して，またお互いに対して愛を示すことができるでしょうか。どうしたら戒めを守り，模範を示して，ほかの人々の心の中にイエスに従いたいという気持ちを起こさせることができるでしょうか。

私たちは皆，家庭，職場，学校，地域社会において，良い模範を示すことによって福音を教えることができます。ある若い姉妹は，祝福師の祝福の中で，旅をするときに出会う人々が，彼女の模範を通して教会について判断を下すようになるという宣言を受けました。以来彼女は，大学のグループ活動，仕事などの関係で旅をすることがよくありました。彼女は祝福の言葉を胸に刻み，これまで教会外の数多くの人々に福音について話してきました。

次に，最近改宗したひとりの姉妹の例をあげてみましょう。彼女はある日曜日に，エンダウメントを受けるために神殿に参入したいと思っていた姉妹が服装の標準について話したことを聞いて非常に驚きました。「あの姉妹の話は私の心にとても強い印象を与えました。彼女の話について考えていくうちに，もし自分が神殿に行くときにはどのような服装をすべきなのかをはっきりわきまえておきたいと思うようになりました。」彼女はやがて，慎みを感じさせない服はすべて捨て，教会の標準に添った物を買うようにしました。2年後に自分自身のエンダウメントを受けましたが，そのころには，衣服はすべて慎み深く，好感を持てる物だけになっていました。

良い模範を示すことの中には，ほかの人を愛し敬うこと，また自分以外の人の考えに対して寛容な心を持つことも含まれます。宣教師訓練センターで用いられているある手引きにはこう書かれています。「よいマナーとは，ほかの人々の感情，考え，持ち物，時間などを大切にしたいという気持ちの上に築かれるものです。そのような敬意は，自分よりも相手のことを大切に考えているしるしです。」（「あなたがたは世の光である」pp.77－78）私たちがほかの人々に接する態度の中に，私たちがどのような人間であり，何を信じているかが表われてきます。

私たちは友人や初対面の人には敬意や寛容な態度を示しておきながら，最も身近な人はおろそかにしてしまうことがよくあります。自分が疲れていたり，病気で苦しみ，ストレスを感じていたりするときも，わがままな子供，思いやりのない伴侶，怒っているルームメイトなどに，やさしい言葉をかけているでしょうか。使徒パウロはこう勧告しています。「あなたがたは皆，心をひとつにし，同情し合い，……謙虚でありなさい。」（Ⅰペテロ3：8）

自分以外の人への敬意と寛容な態度は，生命そのものへの敬虔さを形作る大切な要素です。私たちはすべての被造物と，神のすべての子供を尊び，敬うべきです。自分が何者かを忘れず，それにふさわしい生活をするなら，私たちは愛を持つことができるようになります。使徒パウロはその愛について「不作法をしない」と言っています。（Ⅰコリント13：5参照）この愛を持つ人は，救い主が私たちを心にかけてくださったように，隣人にやさしい思いやりを持つことができるようになります。

デビッド・O・マッケイ大管長は，次のように述べています。「美しく，つつましやかで，やさしい女性は，創造の傑作である。

女性がこれらの徳に人生の光となる正義と信心，またほかの人々を幸福にしたいという抑え難い感情と希望を添えるならば，彼女が真に偉大な人々の中に数えられることを疑う者はだれもいないであろう。」（「自らの学び」p.261）

訪問教師への提案

1．模範を通してほかの人に良い影響を与えた体験について話す。
2．良い模範を示すには，どうしたらよいかについて話し合う。

（「家庭の夕べアイデア集」pp.178, 187－88, 247－48, 252－53, 258－61など，愛について述べた資料を参照するとよい）

●5月の家庭訪問メッセージ●「愛は高ぶらない，誇らない」
目的：高慢に陥ることなく，義を求める。

結婚生活にみたまを求める

主に対して従順になるように努めるならば，私たちはもっと容易に伴侶との関係を良いものにしていくことができます。

テレンス・ロ・オルソン

「スーザンのけんか腰の態度がもう少し治ってくれさえすれば，もっと良く気持ちを伝えられるんだが……。」夫のケントは思いました。ふたりは，お互いに気持ちが離ればなれになっていたのです。ケントは，結婚したばかりのころに感じた一致をなんとかして取り戻したいと思っていました。

ケントは，自分たち夫婦がうまくやっていくにはスーザンに変わってもらうしかないと思っていましたが，やがて自分にも変えなければならない点があるのではないかと思うようになりました。「スーザンと一致するために自分にできることは何だろうか。」そして，この思いはさらに，「自分はどのような人間になる必要があるのだろうか」(IIIニーファイ27：27参照）という疑問に変わっていきました。

この疑問は，どうしても彼の頭から離れませんでした。彼はまず先週の土曜日のことを思い起こしてみました。スーザンはプライマリーのための準備におおわらわでした。彼の心の中には，そのために息子のサッカーの試合に遅れるのではないかといういら立ちがありました。そのいら立ちは午後にはさらにふくれあがり，同時にプライマリーのために何時間もの時間を費やす彼女に嫉妬心まで持ち始めていたのです。

しかし，みたまの導きを求めながら聖典を読んでみると，そのことに対する見方が変わってきました。自分はどのような人間だったのだろうか。彼女の召しに協力的だっただろうか。喜んで援助していただろうか。そう考えてみると，彼は否定的な答えしかできない自分を認めざるを得ませんでした。

妻に対する批判的な気持ちは，自分の利己心から生まれたものであることがわかり始めてきました。彼は自分がいかに無理解だったかと痛感せざるを得ませんでした。そして自分を支え，犠牲となってきてくれた妻のことを思うと一層胸が痛みました。その同じ土曜日の朝，驚いたことにスーザンは早起きして，彼が事務所に提出しなければならない報告書のタイプまでしてくれていたのです。

ケントのような状況について，聖典にははっきりと次のように述べられています。「神と交わりをしていると言いながら，もし，やみの中を歩いているなら，わたしたちは偽っているのであって，真理を行っているのではない。」（Iヨハネ1：6）

あら捜しをする態度を悔い改め，主に助けを願うようになってから，彼は今まで以上にみたまのささやきを受けるようになりました。そしてこれまで無視してきた霊的成長の必要性に目をむけるようになりました。彼女をどう変えたらよいかということよりも，妻とどうしたら一致していけるかということを聖霊を通して学んだのです。

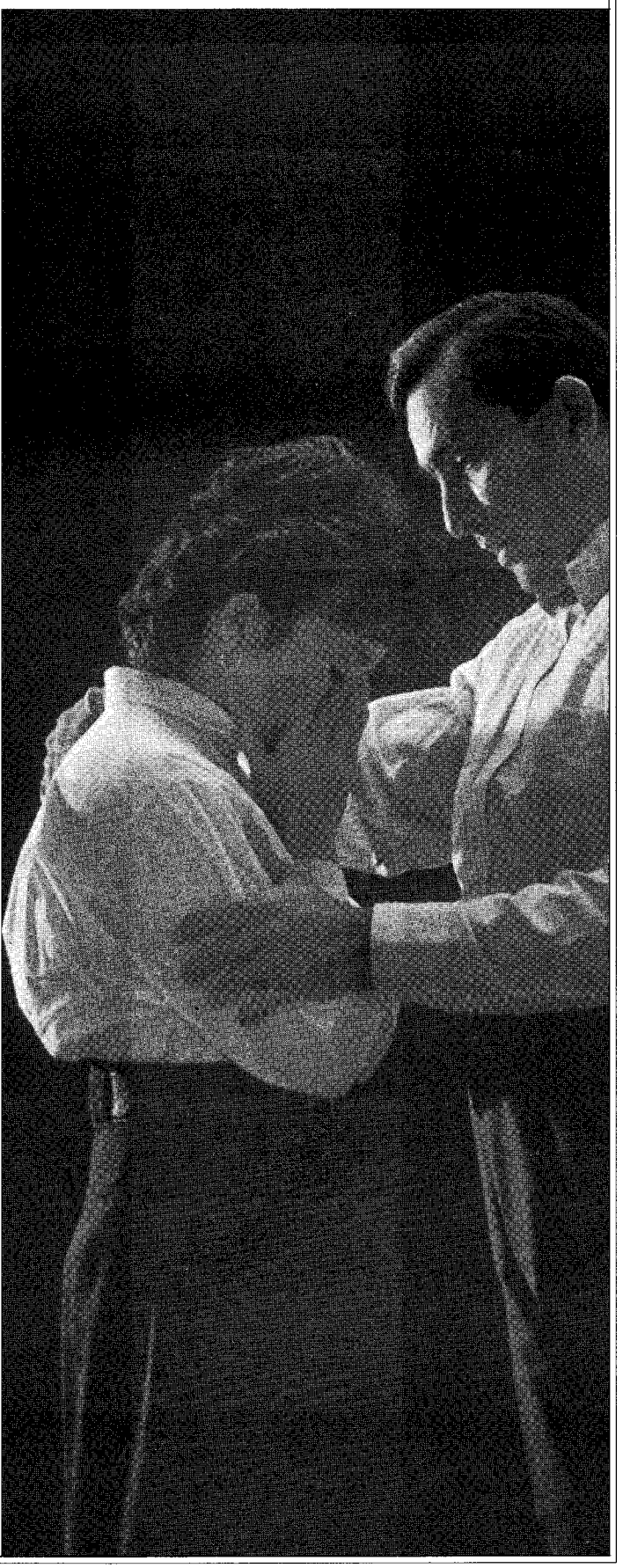
どのような答えが与えられるか

私たちは，主に対して従順になるよう努力するなら，もっと容易に伴侶との関係を良いものにしていくことができます。みたまが私たちに，どのような男性，あるいは女性であるべきかを教えてくれるのです。

一方的に相手を攻撃的であるとか，不正であるとか，鈍感であると決めつけてしまう人が，はたして主に対してどのような答えが期待できるというのでしょうか。そのような思いで祈って，確かな答えが得られるでしょうか。ねたみや恨み，怒りそのほかクリスチャンらしからぬ思いを持ち続けている間は，みたまの導きを拒んでいることになります。

では相手がそうした状態を続けている中で，一方が真心から神の導きを求めた場合はどうでしょうか。あまりあってほしくないことですが，熱心にみたまを求めている方の人が，相手の無関心さと「不従順」な態度に腹を立ててしまうことが多いのです。そうなってしまうと，かつてはやさしさと平安があったところに，荒々しいいら立ちの気持ち，ひいては傲慢さが募るばかりです。

中には次のように言って，こうした態度を正当化する人



もいます。「不従順な伴侶を持つことがどんなに大変なことかこれでおわかりでしょう。夫が腹を立てていたり，冷淡なのに，主の勧告に従うのは本当にむずかしいのよ。」

しかしこのような考え方は間違いです。それは，「こんな状況でなかったら，聖霊の導きを求めて，うまく対処できるのだけど」と言うのと同じようなものです。霊感が得られないのは，外的な状況のせいではありません。私たちの霊的状態によるのです。自分でほこりを舞い上げておきながら，見通しがよくないと不平をもらしているのと同じです。

「君は恐れているんだね」

カレンは涙ぐみ，取り乱した様子で扶助協会から帰ってきました。一生懸命にレッスンの準備をしていった彼女は，うまくレッスンができたと思っていたのです。ところが，そのあとで，廊下でふたりの姉妹が彼女をけなしているのを耳にしてしまいました。彼女の心は痛みました。

彼女は夫のマークに一部始終を話しました。姉妹たちが自分のことをそのように思っているのだとしたら，監督に解任をお願いする以外にないと彼女は言いました。マークは，あまり急いで結論を出さないようにと忠告し，「みたまの導きを求めてみたらどうだい」と言いました。

それを聞いたカレンはさらに追い討ちをかけられたような気持ちになり，思わず「あなたもほかの人と同じだわ。私がどんな気持ちでいるのか，まるでわかってくれないのね。私はただどうすべきかを教えてほしいだけなの」と言いました。マークはここで彼女と議論することもできたはずです。また，彼女の方こそ，自分に対して教会で彼女をけなしていた姉妹たちとまったく同じ態度をとっているということも指摘できたはずです。しかし，それもしませんでした。その代わり，彼はただこう言ったのです。「ぼくは君の敵になりたくないんだ。」

カレンは戸惑いました。彼女には夫が本気でそう言って

いるのか，ただ精神的に自分の方がレベルが高いことを示そうとしているのか見当がつきませんでした。マークは「少し考えさせてくれないか」と言うと，その部屋から出て行きました。

彼は妻の受けた屈辱と現在の苦しい心境に同情しました。妻からの批判的な言葉は，彼の心を傷つけましたが，彼はそのことを考えないようにしました。マークは，彼女に言い返すのがいかに良くないことかを理解していたのです。彼はその問題について深く考え，祈りました。その結果，彼はカレンに心を和らげるよう強制することはできないこと，彼女の気持ちを変えられるのはみたま以外にはないことに気づきました。

マークのとった行動は，みたまの導きを受けている人がとる行動の一例にすぎません。主は，それぞれの状況に合った特別な導きを与えてくださいます。「君は恐れているんじゃないのかな。」マークが言いました。彼の心の中は，妻に対する愛と思いやりでいっぱいだったのです。「君が何を恐れているかはわからないが，完全な愛は恐れを取り除いてくれるはずだよ。君の心の傷を癒すには，批判的な姉妹たちを愛するしかないと思うね。」

「愛」と「恐れ」という言葉がカレンの心に何度も浮かんでは消えました。自分を思ってくれる夫の愛に彼女の心は和らぎ始め，それまでの荒々しい言葉を悔い改めるようになりました。そして翌日，彼女の方からこう言いました。「勝手なことばかり言ってごめんなさい。扶助協会の教師に召されたとき，主は，私が人々の重荷を軽くすることができるだろうと約束してくださったの。それなのに，自分のちっぽけなプライドのために，かえってみんなの重荷になってしまっていたわ。」みたまのささやきを受け，新たな理解を得たカレンは，自信を取り戻し，クラスの姉妹たちに対してさらに深いキリストの愛をもって接するようになりました。

神につけることを第一にする

一致した夫婦関係は，みたまを家庭に招く大きな力となります。これまでにあげた例のように，夫婦の心が離ればなれになるようなことがあってはならないのです。互いに交わした誓約を守り，神のみこころを行なう人々の間には一致が生まれます。それによって，相手が霊的な導きを受けるにふさわしい生活ができるよう互いに助け合うようになります。互いに愛と思いやりを模範で示し，神につけることを第一に考えるからです。このような夫婦とそうでない夫婦との違いは，回復されたこの教会とほかの教会の違いと同じです。みたまの導きと聖めの力を受けているかどうかという点で異なっているのです。

こうして考えてみると，みたまを受けるには，何をするかということよりも自分自身がどのような人間であるかということの方がはるかに大切なことがわかります。はた目によく見えるだけの表面的な行ないで主を欺くことはできないのです。どんなに神に導きを求めても，神に心を開こうとしない人に導きは与えられません。「人はどうしてまだ仕えたこともなく，見も知らず思いもかけない主人を知ることができようか。」（モーサヤ5：13）個人的な霊感を受けるには，善を行なうようにとのみたまの絶えざる勧めにこたえなければなりません。

啓示を受けるにふさわしい従順な生活をするという教えは，ほかの人々にとってはすばらしいものかもしれないが，自分にはとても無理なことだと思っている人がいるかもしれません。しかし，ケントやスーザン，カレンやマークの経験から明らかなように，犠牲を惜しまず，謙遜な態度で勤勉に努めるなら，確かにみたまの導きが得られるのです。そして彼らがそれぞれの問題を解決したように，私たちも自分の問題を解決することができるようになるのです。□

＊テレンス・D・オルソン：ユタ州プロボ，ブリガム・ヤング大学家庭・社会科学部助手。ブリガム・ヤング大学第6ステーキ部副ステーキ部長。

1019号棟の祈り

ジョン・B・フィッシュ

最近，私たちは神権定員会の集会で，祈りについて，また生活の中で祈りの果たす役割について話し合いました。祈りをする場所や祈りの態度などについて話し合った後，祈りに関する個人的な経験談に話が移りました。

主はこれまでに数えきれないほど私の祈りにこたえてくださいましたし，私自身も祈りに対しては非常に強い証を持っていました。ところが，私の頭にとっさに浮かんできたのは，1968年にテキサス州サンアントニオの駐留地で基礎教練を受けていたときの経験でした。

私の所属していた空軍の訓練グループは，1019号棟を営舎として割り当てられました。それは左右の端に両開きのドアがあり，側面に窓のある典型的な2階建ての軍用営舎で，同様に白く塗られたほかのたくさんの建物の中に並んで建っていました。

私のベッドは，2階の裏手の方にありました。階段を上がると，右手に訓練官の部屋が，左手にはトイレがあり，前方には暗い木製の床がまっすぐに続いていました。私のベッドは，30脚のベッドと一緒に横に足を並べて置かれていて，小型のロッカーが頭側にありました。私が寝起きしていたのはそのベッドの下段でした。

上段に寝ていたのは，ウィリアム・E・ウィルソン，通称ウイリーという，アメリカの南部育ちの小柄なたくましい黒人でした。彼は実に敬虔ですばらしい人でした。

私はその駐留地での最初の日から，いつも以上に熱心に祈る必要があることを感じていました。しかし，同時にそのような営舎の中でひざまずいて祈ることができるだろうかという不安もありました。

そこでの最初の晩，私は辛抱強く消灯時間を待ちました。訓練官の部屋にあるタイマー装置によって，明かりは夜9時には自動的に消え，翌朝4時45分にはまたつくようになっていました。

9時20分ごろ，私は音を立てずに素早くベッドを抜け出し，ひざまずいて祈り始めました。私は神様に，妨げられずに祈ることができるように助けを願いました。

全員が床に就いているはずの時間でしたが，多くの者がまだ懐中電灯の明かりで靴を磨いたり，ライターの光で手紙を書き続けていました。また話に夢中になっている者もあちこちにいました。

私は祈りを終えると，ウイリーのじゃまにならないように，またそっとベッドに戻りました。

私はこれを毎晩，１週間ほど続けました。

駐留地での初めての安息日の朝，私たちは６時まで寝ていてもよいことになっていました。６時を少しまわったころ，眠気がさめないままベッドの縁に座っていると，訓練官のブラッドベリー軍曹が部屋に入ってきました。

そして厳しい口調でこう尋ねたのです。「だれか教会に行きたい者はいるか。」

「はい。」私は大きな声で答えました。その瞬間，１階も２階も営舎全体が水を打ったように静まりかえりました。

「私の部屋に来い，フィッシュ。」訓練官は声を落として私に命じました。

この１週間，私たちは決して自発的に何かをしてはならないことを学んできていたはずでした。ところが私は自分から進んでそれを申し出たのです。

「君のしたことは間違っているよ。」わきを通り過ぎようとした私に，ウイリーがささやきました。

私は軍曹の部屋に入り言いました。「航空兵フィッシュ，命令どおり出頭いたしました。」

「休め。座れ。」私は言われるとおりにしました。

「どの教会に行っているのかね。」

「末日聖徒イエス・キリスト教会です。」私の返答に軍曹は小首をかしげました。

「モルモンのことです。」重ねて私が言いました。

「ああ，モルモンなら親しい友人がいる。」やや笑顔を見せながら，彼はわびるように遠慮がちに言いました。私は軽くうなずき返しました。

「集会所はどこにあるかわかっているかね。」彼が尋ねました。

「いいえ，わかりません。」

彼は机の引き出しを開け，駐留地内の住所録を取り出してどこに行けばよいかを教えてくれました。さらに従軍牧師の名前と電話番号を教えてもらった私は，軍曹の部屋から直接電話を入れさせてもらいました。牧師のおかげで，神権会は９時から始まることがわかりました。

必要な情報をすべて聞いたあと静かに受話器を置くと，ブラッドベリー軍曹が言いました。「外出許可を出す。６時までには帰営すること。」

「はい。」

軍曹の部屋を出てベッドに戻る途中，全員に聞こえる声でブラッドベリー軍曹が言いました。「フィッシュを除いて，食事以外は全員外出禁止。」

その日，教会から帰った私に，何人かが皮肉まじりの言葉をかけてきました。

「やあ牧師さん。」ひとりが言いました。

「神様は元気だったかい。」またひとりが言いました。

私は努めて笑顔を保ちながらベッドの方に歩いていきました。ウイリーがベッドの上で本を読んでいるのが目に入りました。

「今朝も言ったように，君は間違っているよ。」あいさつ代わりに彼の言葉が返ってきました。教会に行くことが間違っていると言われたのは，生まれて初めてでした。

私は着替えると，自分の所属するグループと一緒に夕食に向かいました。しかし，一緒に座ってくれたのはウイリーだけでした。

日曜の夜を，皆は思い思いに読書をしたり，手紙を書いたりして過ごしていました。

私は今までどおり，9時15分ごろにベッドから静かに起き上がると暗やみの中でひざまずきました。辺りはあい変わらず騒がしいままです。

ところが祈り始めた途端，聞き慣れた声がこう叫んだのです。「静かにしろ。牧師が祈っているんだ。」

ウイリーの声でした。

1019号棟の2階は一瞬にして静まりました。私たちの中の大半の者が，間もなくインドシナ半島での戦線に配属されることになっていたのです。私には，皆が祈りによってもたらされる安らぎを求めていることがわかりました。

全員の丁重な同意を得て，それからの6週間，私は毎晩9時15分きっかりにベッドの支柱のわきに立ち，1019号棟の2階にいる60人のために2，3分祈りを捧げることになりました。このわずかな祈りの間，私たちは軍務から遠く離れて，まるで聖所にいるような心地がしました。

祈りの最後には，必ず何人かが静かに「アーメン」と言い，大半の者は「ハレルヤ」と唱えるのでした。しかしそれは大した問題ではありませんでした。私は，ほぼ40夜全員を代表してそこに立ち，共に同じ神に祈ったのです。そして主はその祈りにこたえてくださったのでした。□

リチャード・カーワン

――慧眼の人

シンシア・ガードナー

リチャード・カーワンは目が見えません。それで，まだ行ったことがない所へ行くときには，いつもその地域の特別な地図を作ります。リチャードはその地図のことを「張り付け地図」と呼んでいますが，それさえあれば何でもわかると言えるほどの実に見事な地図なのです。その地図では，高速道路はひもで「描かれ」ています。一般道路は細い糸，そして湖や公園はまた別の繊維といった具合です。興味のありそうな場所は，触ればわかるように一つ一つ違ったものが張りつけられています。

ユタ州プロボにあるブリガム・ヤング大学で教会歴史と教義の教授として勤めるカーワン兄弟は，こうして自分で作ったものを喜んで人にも分けてあげます。彼はこんな話をしてくれました。「メキシコシティーに行ったときは，市と国の地図を作りました。何組か同じものを作りましたので，一緒に持って行って，盲人のための組織に寄付してきました。だれかの役に立てばうれしいですね。」現在ではカーワン兄弟は，こうした地図の複製をプラスチックで作っています。そうすれば，元の繊維の感触を残したまま，はるかに耐久性に優れたものができるからです。

カーワン兄弟のその地図は確かにすばらしいものですが，彼自身の方向感覚の

鋭さはそれを上回るものです。友人たちの話によると，カーワン兄弟には自分が今どこにいて，どこへ行こうとしているのか，そしてどう行ったらよいのかということを察知する不思議な能力が具わっているというのです。自分のよく知っている通りを行くときには，運転手に向かって「その街灯のある次の通りを右に曲がって」などと言うことがよくあります。あるいはまた，ほかの州から訪ねて来た人などに，どの方向へ行ったら目的地へ着けるのかを教えたりすることもよくあるといいます。

妻のダンは，リチャードが自分の知っている地域を歩くときには，ひとりで，しかもかなりの速さで歩くことをとても心配しています。「主人はつえは使いませんし，盲導犬も使おうとしません。しかも，歩く速度を緩めないものですから，何かにぶつかったりしないかと心配です。」

リチャード・カーワンはまだ若いころ，自分の人生の設計図を書きあげました。以来，自分の目が見えないことで落胆したことは一度もありません。「少しは見えるんですよ」と本人が言っているように，彼はまったく暗やみの世界にいるわけではなく，かすかに明暗を感じることはできるのです。「私はカリフォルニア州のロサンゼルスで生まれ育ったんですが，そこでは普通の子供とまったく同じようにして大きくなりました。母は私に声を出して本を読んでくれましたし，父もとても協力的でした。まだ十代の初めのころ，私はいわゆる『視力回復プログラム』を受けさせられました。そこでは，拡大文字の本を読んだり，特別に明るいライトを使って本を読んだりしました。しかし，私にはそれほど役に立ちませんでした。ほとんど読めなかったからです。それで高校に入ると，今度は点字を学ぶことにしましたが，続いたのは1学期の間だけでした。あまり好きにはなれなかったのです。」

リチャードは15歳で祝福師の祝福を受けたときに，自分の人生の設計図の概略を思い描きました。彼はその中で，シオンの美しい娘（創世6：2参照）と結び固められ，著作活動や，みずから声をあげることによって，人々に救いを宣言するであろうと約束されたのです。

1953年にスパニッシュ・アメリカン伝道部に召されるまで，リチャードは点字を使うことを潔しとしていませんでした。しかし，伝道に出て考え方が変わったのです。「そんなふうに考えるのは愚かだということがわかりました。使える道具がそこにあったのに，私はそれを使っていなかったのです。それから私は一生懸命勉強して，速記用の点字まで習いました。」

やがてその成果を発揮する機会がやって来ました。あるとき，ほかの教会の牧師との討論に呼ばれたのです。カーワン兄弟は，ふたりで話をしている間，速記用点字で書いた聖典をひざの上に置いておきました。最後にはその牧師は自分の敗北を認め，実によく聖典に精通しておられるとカーワン兄弟をほめたたえました。リチャードはにっこりうなずくと，こう言いました。「ええ，私はいつも神のみ言葉に触れていますから。」

リチャードは自分の人生を一層実り豊かなものにするために，もうひとつ重大な決定を下したことがあります。それは伝道部長と訪問中の教会幹部クリフォード・E・ヤング長老が指導した，ある地方部大会でのことでした。このとき，カーワン兄弟は聖霊の力を非常に強く感じ，「いつもこのような気持ちを感じられるような仕事をして生計を立てるには，何をしたらいいのだろうか」と考えました。

答えはすぐに与えられました。それは「ブリガム・ヤング大学で宗教を教えなさい」というものでした。その日の午後を期して，リチャードは自分の進むべき方向をはっきりと見定めました。伝道から帰ってから，1年2カ月後に，「シオンの美しい娘」ダン・フートン姉妹と結婚しました。次の3年間は，カリフォルニア州のパロ・アルトで，ダンから文献を読んでもらいながら，スタンフォード大学の歴史学の修士と博士の課程を修了したのです。

1961年に，リチャード・カーワンはブリガム・ヤング大学で宗教学を教え始めました。最初は教師としての成功はむずかしいだろうと言われていましたが，4年後には学生たちから年間最優秀教授に選ばれました。すでに教鞭をとって28年になります。

カーワン兄弟はいつも忙しく著作に励んでいます。これまで数冊の本を著わし，教会に関連した様々な事柄について講義をし，教会の機関誌などのために何度も記事を書いてきました。最初のものは新婚旅行の最中に書いたものです。現在，教会の福音の教義クラスの資料作製委員会の委員長を務めています。この委員会の仕事は日曜学校のクラスのテキストを作ることです。「彼は一緒に働いていてとても楽しい人です。」委員会の仲間はこう言っています。「彼の福音に対する理解は本当にすばらしいものです。でもユーモアのセンスもあるんですよ。」

リチャードの最高の支持者は，妻のダンです。それは最初の出会いのときから変わっていません。ふたりは4人の娘とふたりの息子の，6人の子供に恵まれています。

リチャード・カーワンは，永遠の生命を受けるために絶えず献身的な働きをしています。幼いころにはっきりと見たあの地図に導かれながら，今もそれに忠実に歩み続けているのです。

＊シンシア・M・ガードナー：ユタ州プロボ第25ワード部の扶助協会教師。また，ガードナー夫妻はプロボ神殿で働いている。

ライラックの茂み

ゲリー・ウォルトン

私が福音から遠ざかってしまったのは，不従順や反抗心のためではなく，健康を害してしまったことが原因でした。その結果，私は主の羊の群れから迷い出るということがどういうことなのかを身をもって知ったのです。

病院で数カ月間の闘病生活をした後，夏も終わりに近いある日曜日に断食証会に出席しました。そのとき私は非常な孤独感にさいなまれていました。会員たちが立ち上がり，主や福音，また指導者や家族への愛を述べ，証する姿を見ながら，私は彼らが福音に対して感じている確信や平安を，なんとしてでも自分のものにしたいと思いました。しかし，健康状態が思わしくなく，私の霊的な感覚も鈍っていて，少しも心を動かされることはありませんでした。

そうこうしているうちにベンス兄弟というひとりの男性が立ち上がりました。大柄で頑強な体つきをした，いかにも働き者という感じの柔和そうな人です。彼は自分の妻がとても大事にしているライラックが大きく育っていることを，主に感謝する証を述べました。

ベンス家ではライラックが伸び過ぎて，彼らの小さな家に差し込む日光をさえぎってしまっていたので，ベンス兄弟は奥さんに，その茂みを刈り取り，根を別の場所に移さなければならないと言いました。ところが奥さんは，枯れてしまうのではないかと心配して夫の提案に強く反対したのです。しかし彼の方もどうしてもそのライラックを刈り取る必要があると思いました。

ベンス兄弟は，その茂みを刈り，苦労の末，ようやく根を掘り起こして，新しい場所に植え替えました。

彼はまた毎日雑草を抜き，水をやりながら，新しい芽が出てくるのをどれほど心待ちにしたかも話してくれました。新しい芽が出てこなければ，妻が大切にしていた茂みを刈り取ってしまったことに申し訳が立たないと思ったのです。彼は，妻の心のうちを思えば思うほど，ライラックの根のことが心配だったと話しました。

そしてある朝早く，彼は土の中から顔をのぞかせている芽をとうとう見つけたのです。それを見てほっと胸をなでおろした彼は，妻をそこへ連れて行き，芽が出たことへの感謝の祈りを捧げたといいます。

それからベンス兄弟は，人生には無力感や孤独感に襲われるときがあるが，それは主が何か特別なみこころをもって私たちを刈り込み，未知の土地へ移されるのにたとえられると話してくれました。もし主が，私たちを，古い葉をつけたままの状態で同じ土地に放っておかれるとしたら，私たちは自分の欠点や弱

点に気づくこともなく，それらを克服する機会もないだろうというのです。そして彼は，再び自分の成長を目指して努力するとき，私たちはそのような試練がなかったとき以上に強くなり，主の目にかなう者となることができるとも話してくれました。

たとえ恐れや苦痛を感じることがあっても，熱心に祈り求めるならば，私たちは自分自身に対する主のみこころを知り，試練の中にも新たな力と目的を見いだすことができるようになります。主はこのようにして私たちに弱点を知らせ，「弱きを強き」に（イテル12：27）変えてくださるのです。

みたまは私に，ベンス兄弟の言葉が真実であると証してくれました。そして私はこの新たな理解を通して，肉体的にも霊的にも元の力を取り戻すために努力を続けなければならないと決心しました。

それから何カ月かたって健康状態も回復した私は，新しいワード部でセミナリーの教師に召されました。私はそれまでの経験を通して，前にも増して熱心に福音を学ぶことができるようになり，新たに見いだした力をワード部の若者たちとだけでなく，教会から離れそうになっている人々とも分かち合うことができるようになりました。

私は何か新しいことを始めようとして不安を感じるときには，目的をもってライラックを刈り込んだベンス兄弟の話を思い起こすようにしています。それによって自分の試練をより高い観点から客観的に見ることができます。私は今，主の目にかない自分自身も満足のいくように成長できるよう祈っています。□

＊ゲリー・ウォルトン：アルバータ州カードストンステーキ部エトナワード部。初等協会主任教師。

苦しみの中

1973年のこと，私と主人は教会の集会で，近年教会内で会員資格の剝奪（はくだつ）や破門の処分を受ける人の数が増えているという内容の話を静かに聞いていました。神殿結婚や自分の持っている証，教会活動のことを考えると，自分自身は大丈夫だと感じていましたが，その話を聞いているうちに，とても悲しい気持ちを覚えました。そのときは，自分がやがて同じような悲しい出来事を経験して，言葉で言い表わせないような大きな苦しみを受けることになるなどとは，夢にも思いませんでした。

私の人生が180度変わったのは，それから数年後，活発なメルケゼデク神権者で帰還宣教師でもあり，かつては副監督の責任も果たして，しかも6児の父親である主人が，教会法廷で会員資格を剝奪されたときのことでした。

まさかそのようなことになるなどとは夢にも考えたことのなかった私は，見捨てられ，裏切られ，踏みつけにされた思いでした。でも，答えを求めて，自分の心を主に注ぎ出していくうちに（サムエル上1：15参照），私はいくつかの永遠の真理を学び，この苦しみに満ちた時期を耐え忍ぶ力を得ることができるようになりました。主はご自身だけにしかできない方法で，情緒的な面でも霊的な面でも，私が立ち直れるように慈悲深い助けをくださいました。

私が今はっきり言えることは，もし法廷で処分を受けたのが私だったとしたら，自分の苦しみもあれほど大きくはなかっただろうということです。私は主のすべての戒めに従うために，長い間一生懸命に努力してきました。そして，福音について強い証を持つすばらしい青年と結婚しました。それが今では裏切りの苦痛を味わうことになってしまったのです。主人はとても変わってしまいました。でも，私にはその状況をどうすることもできません。アロン神権を受ける年齢に近づいている息子のことを思うと，涙が止まりませんでした。父親がこの大切な神権をみずから授けることができないなどと，どうやって説明したらよいのでしょうか。もうひとりの息子は間もなくバプテスマを受けることになっています。これにも，何らかの説明をしてやらなければなりません。私は家族にも友人にもワード部の会員にも顔を合わせるのが怖くなりました。私はできるだけのことをして，自分にも子供たちにも，「今は幸福なのよ」と言い聞かせていましたが，心の中ではまるで悪夢を見ているような思いでした。

悲しみと失望感とを紛らすために，私は仕事に就きました。だれか話し相手が必要なときには，主に心を向け，助けと慰めをいただきました。主ご自身が私のカウンセラーでした。

この事件の何年か前，まだ幼かった息子を亡くしたとき，私は自分を責めたものでした。事情に通じた思いやりのある

からの成長

主人が教会の会員資格を剝奪されたとき，私は主に祈って，私の生きる意味を返してくださいとお願いしたのでした。

医師は，このようなことはよくあることだし，だれが悪いというものでもないと慰めてくれました。深い悲しみの中で，私はどうしても割り切れない思いをぬぐいさることができませんでした。この悲劇を防ぐために何か手だてがなかったのでしょうか。しかし医師は，「自分を責めようなどという気は起こさないで」と言うのでした。

教会法廷の直後，私は自分がまた同じ状態に落ち込んでしまっていることに気づきました。私には，主人の取る行動についてはどうすることもできないし，私が責任を取ることもできないのだということが次第にわかってきたのです。私は，自分の力の範囲内で変えられる事柄に心を集中させるようにし始めました。

同時に私は，自分だけでなく，主人の状況もありのままに受け入れようと努力しました。私たち夫婦の霊的な進歩をほかの人と比較するのは無意味だということがわかったのです。そのころは，模範的な父親や夫について書いた記事などを読むと，失望感に打ちひしがれてしまいそうでしたが，やっと自分に，「あの人たちとは状況が違うわ。きっと主が助けてくださるわ」と言えるようになったのです。それまで受けた祝福に感謝するようになると，愛をもって受け入れようという気持ちも強くなってきました。それとともに，家族全体の状況も良くなっていったのです。自分でも驚いたことですが，それまでの人生で，あのときほど幸福感と安心感とを味わいながら生活したことはなかったように思います。

ときには，ある祝福を求めるのにためらいを感じることもありました。主人の状況が状況でしたので，その祝福を願っても授けられないのではないかと恐れていたのです。しかし，幸いなことに，主は私のそのような気持ちを取り除き，何年にもわたって物質的にも霊的にも多くの祝福を授けてくださいました。

私はそれまで夫が会員資格を剝奪されたことでひどく自尊心を傷つけられていました。そのころ，私はワード部の補助組織の会長として，毎週何時間も忙しく働いていましたが，主や監督がこのような状況にある自分をいつまでもその召しにとどめておくことがあり得るだろうかと考えていました。私は心身ともに疲れ切っていたのです。しかし，解任の話はなく，私はその召しにとどまりました。あとになってわかったことですが，主はこの召しを通して，私の能力が必要とされていることを示してくださったのです。子供たちも，学校でも家庭でも，以前と変わりなくよい生活を続けていました。この点でも主は，私たちが親としては失敗していなかったのだということを確信させてくださったのです。こうした経験から私は勇気づけられ，自分も価値ある存在なのだということを確信するようになりました。

数週間がたち，数カ月がたち，数年が過ぎていきました。苦しみが小さくなるときもあれば，逆に大きくなるときもありました。ほとんどの人が会話の中であのことに触れるのを避けていましたが，それにも慣れてきました。皆，何を言ったらよいのかわからず，だからこそ黙っていてくれたのです。心からの愛を示して，「どう，皆うまくいってる？」と尋ねてくれた友達，そして忍耐強く私の話に耳を傾けてくれた友達，そうした人々への感謝の気持ちは決して消えることがありません。

主は私を絶えず慰め，教えを授けてくださいました。主人が自分自身を変えようとしないことについて，私は不満を言ったこともよくありました。しかし，天父は決して私のそのような批判をよしとはなさいませんでした。天父は愛に満ちた方法で，霊感を通じて私に忍耐について書かれた聖句を教えてくださったのです。また，私の妻としての役割に心を向けさせてくださったこともあります。主は教義と聖約25章の中で，エマ・スミスに対し，夫を助け，慰めを与えよと言われました。それはエマだけでなく，私にも当てはまる部分があることも悟りました。この章を繰り返し読むたびに，夫が価値ある人間だということがさらに強く確信できるようになりました。

私は毎日毎日，夫への愛が深まるようにお祈りしました。主はそれに対して，思いもかけない，しかしわかりやすい方法でこたえてくださったのです。私はそれまで，人は自分が仕える人を愛するようになるということを知っていましたので，自分を忘れて夫に仕える機会はないものかと考えていました。その願いは意外なほど直接的な形で現実のものとなりました。夫が1年のうちに，3回も小さな事故に遭ってけがをしてしまったのです。自宅で療養していた短い期間に，私は精一杯の看病をし，関心を示すことができました。夫への愛と感謝を深める機会を幾度も与えられたのです。

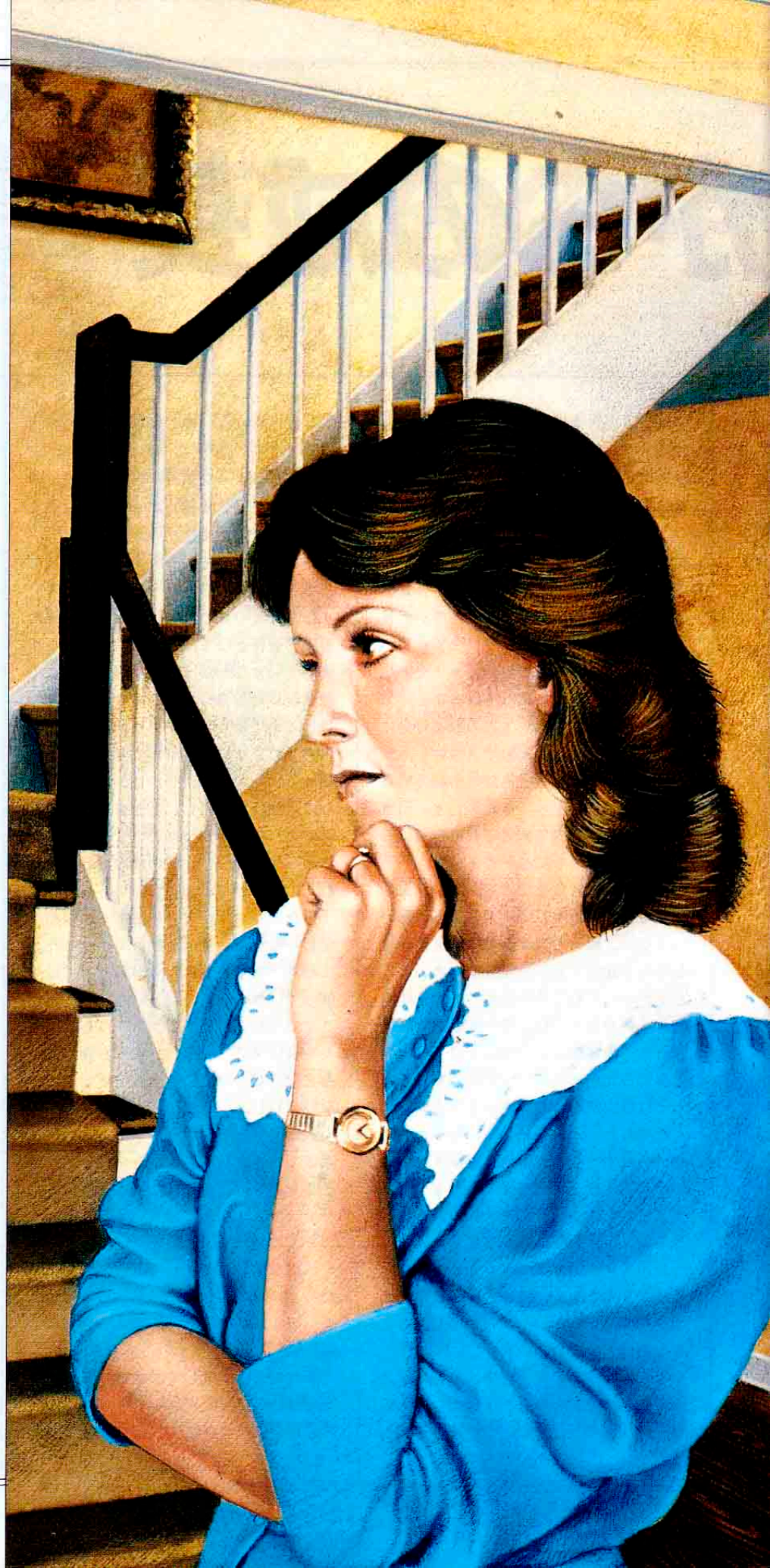
また，奉仕といっても別に大きなことをする必要はないということもわかりました。主人は仕事の都合で家を空けることも多かったので，家にいるときには，極力主人を中心に考えることにしました。

いつも前向きであるように努め，主人を批判するようなことは，本人に対してはもちろん，だれに対しても避けるようにしました。そしてこうしたささやかな努力の積み重ねによって，すばらしい結果が生まれました。枯れかかった草花が光と栄養を与えられて生き返るように，お互いに対する心からの愛がよみがえってきたのです。

私はモーサヤ書の27章から大きな慰めと希望を得ました。そこには父親の祈りと信仰のゆえに，息子アルマにみ使いが現われたことが書かれています。(8－17節参照) 主はこの聖句を通じて，私たちがほかの人のために捧げた祈りにもこたえられるという確信を授けてくださいました。私は主人のために祈ることを決してやめまいと決心しました。いつの日か主人の態度が変わる日が来るという希望を持ち続けるのは，私にとって確かにむずかしいことですが，ほかの何にも増して大切なことなのです。

愛が神からの賜であることが私にもわかりました。教会法廷のあと，こうして私は主人に感謝し，ありのままの主人を受け入れようという深い思いに満たされました。この麗しい気持ちを，いつまでも心の中にとどめておきたいと思いました。それで私は，モロナイの勧めに従い，「愛で自分……の胸を満すためにありたけの心をつくして」(モロナイ７：48)毎日祈っています。

主人も今では会員資格を回復されています。確かに多くの点で以前よりも良い状態へ変わってきました。しかし福音に対する思いや活動への参加意欲といった点では，まだまだこれからです。それでも，私はそれを変えることができるのは主人自身だということを十分承知しています。自分たちの失敗に目を向けるのではなく，今行なっていることに対して感謝の気持ちを抱くこともできるようになりました。また，驚いたことに，人はどのような状況下にあっても幸福感を味わえるのだということもわかりました。そして，生涯を通じて最も苦しい体験があったからこそ，一番大きな成長もあったのだということもわかったのです。(編集者注：筆者の要請により，匿名で掲載) □



質疑応答

本誌の答えは問題解決の一助として与えられたものであり，
教会の教義を公式に宣言するものではありません。

化石などが示す地球の歴史と，聖典に記されている地球の歴史はどのように関連づけていったらよいでしょうか。

回答者

モーリス・S・ピーターソン

（ブリガム・ヤング大学地質学教授，ユタ州プロボ東ステーキ部，ステーキ部長）

地球の創造や初期の歴史に関しては，未知の事柄がたくさんあります。聖典にも詳しいことは記されていませんし，科学的根拠も不完全です。私たちが今地球の歴史について真実であると思っていることは，さらに大いなる知識に照らしてみれば，一面的な真理にすぎないかもしれません。しかし私たちは，主が「すでに過ぎ去りしこと，また何人も知らざる隠れたること，この世の造られたる事物のこと，またこの世の目的，終りなど，すなわち最も貴きこと，天上のこと下界のこと，地の中のこと地の上のこと，また天にあることなど」「すべての事を顕し」（教義と聖約101：32－34参照）てくださる日が来ることを知っています。

その日が来るまで，私たちは聖典で教えられていることや，科学により解明され，収集されたものを根拠に真実であると考えられている事柄に頼るしかありません。

実際私たちは，聖典と世の知識から神とその創造物について学ぶよう勧められています。「汝ら熱心に教えよ，さらばわが恩恵は汝らに伴い，かくして汝らの理解する必要ある理論と原理と，教義と福音の律法と，神の王国に就けるすべての事は更に完全に教えらる。

また天にも地にも地の下にも関わりあること，またすでに起りたること，今有ること，近く必ず起らんとすること……もまた然り。」（教義と聖約88：78－79）

ジェームズ・E・タルメージ長老の次の言葉は，この問題に関する末日聖徒の考え方をよく示しています。「人間がこれまでに学んできた真理，また今後明らかにされる真理は，すべてイエス・キリストの福音の中に包含される。」では，このような考えを念頭において，最近の化石の研究結果に目を向け，それらを聖典と比較してみましょう。

神はこの地球と地上のすべての生物の創造者です。「はじめに，神は天と地とを創造された。……神は……すべての動く生き物とを……創造された。……神が造ったすべての物を見られたところ，それは，はなはだ良かった。」（創世1：1，21，31）

神が創造されたものの中には，今は絶滅してしまっているたくさんの種類の生物がいたと思われます。化石を含んだ岩石は地上の至る所にあります。これらの化石は，かつて生存していた動植物のなごりで，今は岩石層の中にその姿をとどめています。

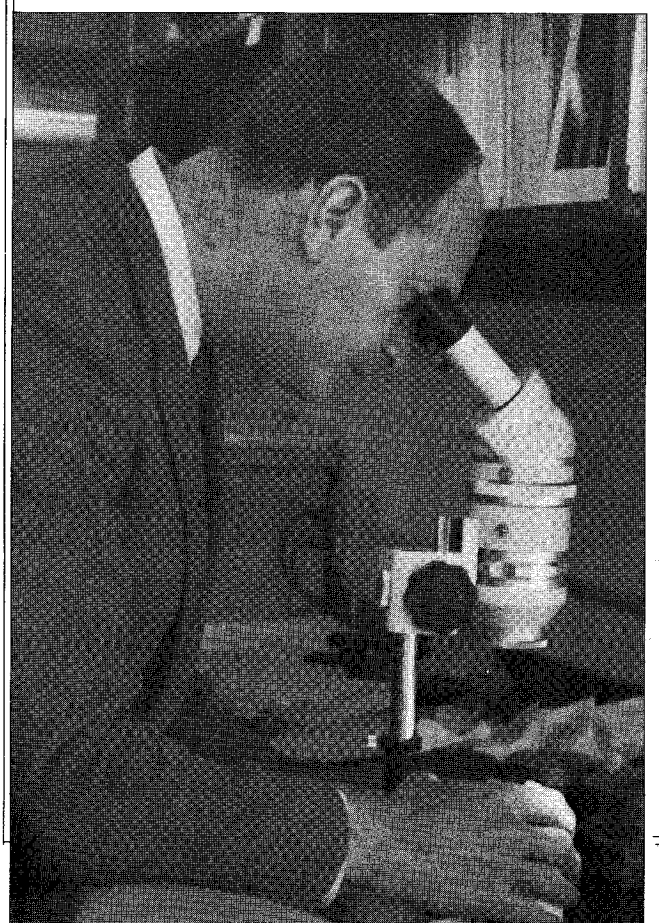
化石が埋まっている岩石層を調べてみると，整然とした一定の型があることがわかります。地質学者でもあったジェームズ・E・タルメージ長老は，1931年11月21日付のデゼレトニューズにこのように書いています。

「これらの非常に単純な形をした動植物のあとに，より複雑な形の生物が現われたというのが地質学者たちの意見である。彼らは岩石という厳然たる記録を見て，単純な生物がより複雑な生物へと進化していったと考えている。」

世界中の堆積岩層を調べてみると，それぞれの化石がどのような地層に現われているかについては，ほぼ共通していることがわかります。さらに，オーストラリア大陸，アフリカ大陸，ヨーロッパ大陸，アメリカ大陸そのほかいずれの地においても，各種の生物がそれぞれ時期を同じくして盛衰していることもわかります。聖典の熱心な研究者の目には，これが聖なる創造主，神が秩序ある過程を踏んでみ業を進められたことの証と映るはずです。創世記に記されているように，地上で生物が創造されたのは植物が最初で（創世１：11－12参照），動物はそのあとになっています。（創世１：20－23参照）これは，植物の出現が動物より早いという化石が示す生物発生の順序と一致しています。

しかしこうした一致は驚くには及びません。なぜなら，この地球を創造された神と，予言者たちに霊感を与えた神は同一のお方だからです。矛盾が起きてくるとすれば，それは私たちが，神はこの問題に関してすべてを啓示しておられると考えたり，科学者の学説というものは，新たな発見がなされるたびに変わるものであるということを忘れてしまうときです。私たちはまた，聖典が与えられている目的と，科学的方法の意図していることの両方に心を向ける必要があります。

そもそも聖典は，イエス・キリストと，またキリストの贖いによって私たちが救いと昇栄の祝福にあずかれるということを証するものです。したがって，聖典は地球が（どのようにではなく）なぜ創造されたのか，また永遠の生命を得るために従わなければならない律法や原則はどのようなものであるかを明らかにしてくれています。一方，科学の目的は，（なぜではなく）どのように地球が造られたのかを知ることであり，自然界を治める律法や原則を理解することにあります。



恐竜の研究について考えると，科学と宗教の役割の違いがはっきりわかります。化石を調べた結果として，恐竜は，２億2,500万年前から6,700万年前まで地上を支配していたという説が立てられています。肉食を主としたものもいれば，植物を餌としていたものもいました。また小型の恐竜もいれば重さ72トン，体長27メートル以上もある巨大なものもいました。

世界中で恐竜の骨が化石として見つかっていることから判断しても，このような生物が実際に生存していたことは明らかです。地球の創造という過程の中で，また太古の世界において，それらの生物が神の計画の中でどのような役割を果たしたのかはわかりません。聖典も恐竜については触れていませんし，科学が目的とするのもそのような生物が存在した理由を説明することではありません。私たちが結論として言えるのは，次のタルメージ長老の言葉以外にありません。「白亜紀の堆積岩のどの地層にも，またどの深海の石灰岩の中にも生物の骨が埋まっている。それらの生物は，地球がまだ人間の住める状態になかったころ，何世代にもわたり生死を繰り返してきたのである。」

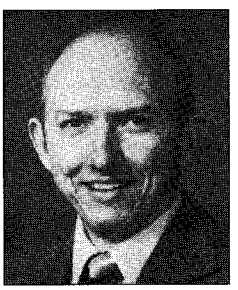
科学の分野における最新の知識と聖典との関係は，絶えず変化しています。科学は今後も地上の生物の歴史を研究し続けていくでしょうし，研究によってさらに多くの知識が得られることは明白です。

聖典の中の言葉を，科学的な研究の成果に一致させようとする試みは何世紀にもわたって行なわれてきました。しかしこれまでの歴史から言えることは，今日得た知識も，翌日の新たな発見によっては覆されてしまうということです。結局は忍耐と謙遜さが（この世でなければ後の世で）あらゆる疑問に答えてくれるのです。

幸いにも，福音の重要な救いの儀式にあずかり，進歩のための神の律法に従うのに，創造に関する詳細な知識は必要ありません。神のみもとに帰るには，聖典と予言者たちの霊感された勧告だけで十分なのです。

しかしこれは，永遠の真理の追求に科学の立ち入る余地はないという意味ではありません。神のみ手になる業を知れば知るほど，私たちは神についての知識を深め，み業を愛するようになります。私は末日聖徒の地質学者として，神が地球を創造された証拠として岩石や化石を研究できることを非常に幸せに思います。壮大な創造のみ業について学んできたことすべてが，天父についての知識を深め，天父の望まれるような生活をするという私の決意につながっているのです。

末日聖徒イエス・キリスト教会は，キリスト教以外の宗教にどのように関与していけばよいでしょうか。



回答者
R・ラニエル・ブリッチ
（ブリガム・ヤング大学ハワイ校副校長）

1975年に，私は教会の教えを学んでいるひとりの若い男性から手紙をもらいました。彼はヒンズー教の大きな宗派に属していて，ヒンズー教の教えの中にもかなりの真理があると感じていました。そのために回復された福音への証が得られずに悩んでいたのです。

私は次のような返事を書きました。「あなたは，真理というものが特定の教会や宗教に限らず，ほかのところにも見られるという点に疑問を感じておられるようですね。……末日聖徒はこの教会を唯一の真の教会であると言っていますが，あなたは，それならほかの宗教の中にも，これほどはっきりと真理の存在が認められるのはなぜなのかと不思議に思われるのでしょう。」

私はさらにこう続けました。「私たちは，どこに真理があっても驚きはしません。……キリストの光がすべての人々の上に，心に注がれており，正直な人々はそれぞれの善い行ないに対して報いを得る権利があるからです。」

わたしはここで教義と聖約の130章20節，21節を引用しました。「そもそも創世の以前より天に於て定められたる一つの変らざる律法ありて，あらゆる祝福はこれに基くなり。すなわち，われら何にても神より祝福を受くる時は，この祝福の基く律法に従うによりて然るなり。」

そしてこう続けました。「永遠の原則に従う人はだれでも，その律法に従った当然の結果として報いを受けます。神はどんな人にもそれぞれの報いを授けてくださるのです。」私たち末日聖徒は，ほかの多くの宗教や哲学の中にも真理があると信じています。これまで地上には，すばらしい宗教指導者が数多く存在し，彼らはその教えを通して，人々の霊的，また道徳的，倫理的な面における理解力を高めてきました。

確かに私たちは，末日聖徒イエス・キリスト教会は唯一の真実の教会であると宣言していますが，それは救いの儀式を執行する権能を授けられた唯一の組織という意味で言っているのです。すなわち予言者や使徒の働きを通して，イエス・キリストに導かれている唯一の組織という意味なのです。教会は救いに関する真実の教義を教えてはいますが，教会だけが真実を教えているということではありません。

教会の初期の時代から，多くの教会幹部がキリスト教以外の宗教に対する教会の立場を表明してきました。私たちは，彼らの信仰に寛容であるだけでなく，敬意を払うべき

です。1978年2月15日，大管長会（スペンサー・W・キンボール大管長，マリオン・G・ロムニー，N・エルドン・タナー両副管長）は，ほかの宗教に対する教会の立場に関して公式な声明を出しています。

「末日聖徒イエス・キリスト教会は，古代および近代の啓示に基づいて，人は皆，先祖の代からの血縁関係によるのみならず，文字どおり永遠の御父の霊の子供として兄弟姉妹であるというキリスト教の教義を喜びをもって教え，宣言するものである。

ソクラテスやプラトンなどの哲学者，またマホメット，孔子，宗教改革者などの世の偉大な宗教家たちは，部分的ながら神の光を受けていた。神は人々を啓蒙し，その理解力を高めるために，彼らに善悪の基準となる真理を授けられたのである。

またヘブル人の予言者たちは，福音を信じるすべての人人に救いをもたらす約束のメシヤ，イエス・キリストの降臨に先立ち，その道を備える役目を果たした。

私たちはこれらの真理とともに，この世と次の世における永遠の救いのために，神がすべての人に十分な知識を授けてこられたこと，またこれからも続けて与えてくださることを確信している。

また，この時代に回復されたイエス・キリストの福音が，人生に幸福と永遠に続く完全な喜びをもたらす唯一の道であることを宣言する。この世で福音を知ることのなかった人々には，後の世においてその機会が与えられるのである。

したがって，私たちが伝えるメッセージは，永遠の御父の娘，息子である真の兄弟姉妹として，宗教や人種，国籍などに関係なく，すべての人の永遠の幸福を願った特別な愛と思いやりに満ちたものであると言うことができる。」

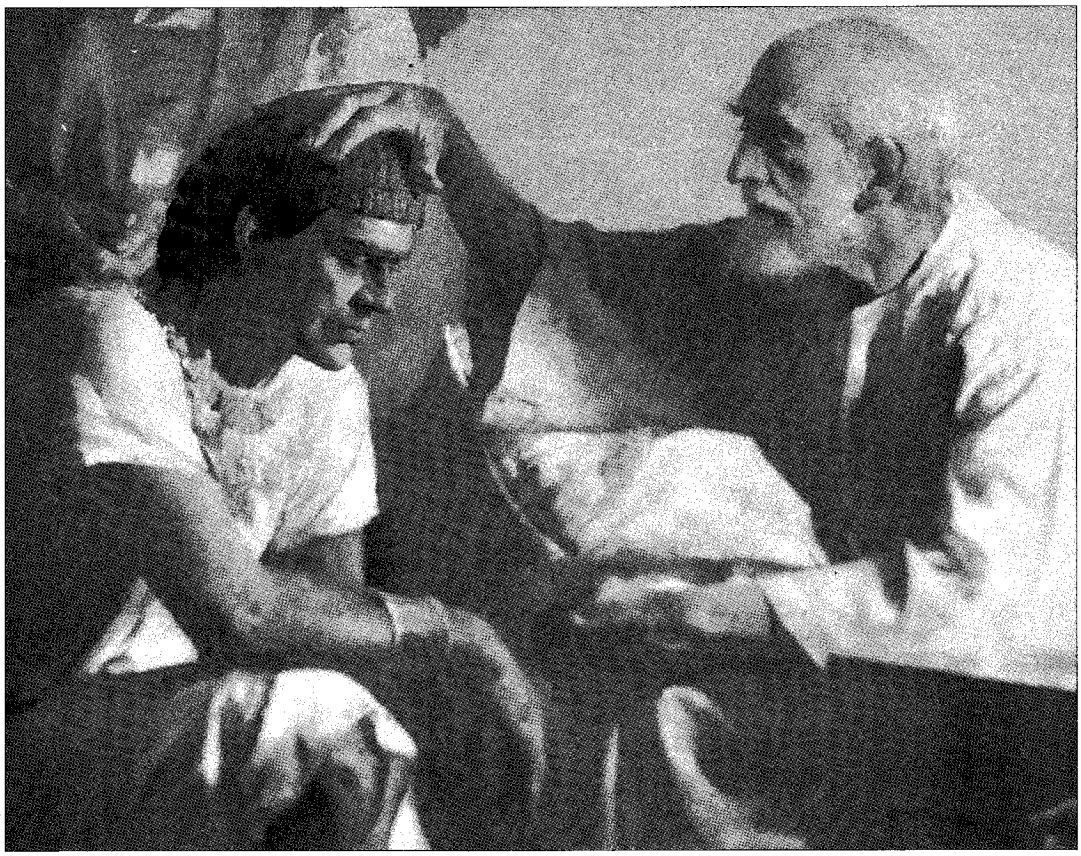
この声明文を要約すると，(1)すべての人間は神の子供であり，兄弟姉妹である。(2)末日聖徒イエス・キリスト教会に回復された福音を通してのみ，完全な喜びが得られる。(3)すべての人は，もしこの世でなければ後の世において，福音を知る機会が与えられる。(4)「世の偉大な宗教家たち」（ほかにも大勢いますが特に声明文に載っている人々）は，部分的に神の光を授けられてきた，ということになります。確かに，マホメットは自分の国だけでなく，国境を越えて多くの人々の宗教心を高め，善を行なう気持ちを強めさせてきました。また孔子もそれまで多くの国々で教えられてきた原則をはるかに超えた高い道徳観念を東アジアの人々の心に植えつけました。

もちろん，ほかの宗教の中には受け入れがたいものもたくさんあります。しかし，そのような宗教の中にも，迷信や魔法などの誤りだけでなく，しばしば真理を見いだすことができるのです。多くの宗教の中には，確かに価値のある，永遠の真理を含んだ道徳観や教義，信条を見いだすこともできます。しかし，それと同時に誤った教え，闇の力が人々をそそのかした儀式なども見受けられます。ほかの宗教を学ぶにあたっては，真理と誤りが入り交じったこうした教えに注意しなければなりません。

簡単に言えば，あらゆる種族，国民，血族，国語の民が真理を認め，ふさわしい生活をし，それらの真理を分かち合ってきたからこそ，それだけ良い世の中を築いてくることができたのです。またそれらの真理が福音の回復に対する備えともなりました。私たち末日聖徒はキリスト教か否かにかかわらず，世の宗教に対して友好的な態度をはぐくみ，宗教の別を問わず，すべての人々に善意をもって接するようにしなければなりません。というのは，大管長会が述べているように，「私たちのメッセージ」は，「すべての人の永遠の幸福を願った特別な愛と思いやりに満ちたもの」だからです。□

祝福師の祝福

昔，ヨセフが父親のヤコブから祝福を受けたように，今日私たちも，祝福師の祝福を通して導きを受けることができます。



皆さんはこの世にあって，天父が自分に何を望んでおられるか考えてみたことがあるでしょうか。私たちがこの世にあるのは，天父のみもとに帰るにふさわしいことを証明するためです。また救い主の生，死，復活によって私たちの行くべき道が示されていることは皆さんもよくご存じと思います。では個人個人に対する導きに関してはどうでしょうか。天父は特別にそのようなものを与えてくださっているでしょうか。

そうです，確かに与えてくださっています。天父は，ご自分の望んでおられることを私たちに知らせるために，個人的な啓示を受けられるようにしてくださいました。この啓示は，祝福師の祝福として私たちに与えられます。祝福師の祝福は，私たちに自分の才能や血統，可能性などを明らかにし，さらに励ましや導き，警告，助言，慰めなどを与えてくれます。

祝福師の祝福は，いわば霊の道路地図であり，みたまによらなければ理解することはできません。したがって，祈りの気持ちをもって読まなければなりません。その中には，神ご自身の目からご覧になった私たちの永遠の姿が映し出されています。私たちはこの個人的な祝福を通して，自分が何者であるかを理解することができます。

祝福師の祝福を授けることができるのは，祝福師として聖任された男性です。教会の各ステーキ部には少なくともひとりの祝福師が聖任されています。祝福師には，ステーキ部内のふさわしい会員たちに祝福師の祝福を授けるために，自らを霊的に整える責任があります。祝福師の宣言する祝福は非常に重要なものです。したがって，世界中の会員たちの祝福文の写しが教会歴史部に保管されるようになっています。

約束される祝福は，個人個人の必要に応じて変わってきます。ときには約束された祝福が成就しそうもないように思われることがあるかもしれません。しかしそのようなときには，天父は私たちとは違った観点から物事を見ておられるということを思い起こさなければなりません。第二副管長のトーマス・S・モンソン長

老は，次のように話しています。

「何年か前，ある祝福師がポーランドに住む……十代の女の子に祝福を授けました。祝福の中で，彼はその姉妹に主の神殿で結婚するという約束をするよう強く心を動かされました。しかし，彼女がポーランドを離れて神殿で結婚することなどはまったく考えられないことで，彼はそのような約束をすることにためらいを感じました。しかし，彼はみたまのささやきにこたえ，促されるままその少女に祝福を授けました。

祝福を授けてから，その祝福師は私のオフィスを訪ねてきて言いました。『私のしたことは間違っていなかったでしょうか。』私は，聖きみたまのささやきに従った行ないはすべて正しいものであることを話しました。すると彼はこう言いました。『でも成就することなどあり得ない約束をしてしまったのです。』私はこう答えました。『真心から主を信頼しましょう……。』それから2年ほどして，ポーランドとドイツとの間で，ドイツ系の者は西ドイツに帰還してもよいとの協定が成立しました。その愛らしい十代の少女は間もなく，結婚すれば自由に主の神殿に行くことのできるドイツに移住したのです。」（スカンジナビア地域大会，1976年8月，p.10）

いつ祝福を受けるべきか

私たちに備えができていれば，人生の中で経験する重大な出来事はより意義深いものとなります。教会員が祝福師の祝福を受けるのは普通1度だけです。ですからふさわしい時にふさわしい状態で，この神聖な機会にあずかる必要があります。教会の大祝福師エルドレッド・G・スミス長老はこのように勧告しています。「12歳未満では祝福を受けないよう強く勧められている。しかし，いつ受けるべきかはすべて各人の成熟の度合いにかかっている。ほかの人々に奉仕したい，主が自分に望んでおられることをしたいという気持ちが持てるようになったときに祝福を受けることが望ましい。」（「インストラクター」1962年2月号，p.43）

若者たちは，将来の進路を真剣に考え始める十代の中ほどか後半に祝福師の祝福を受けることが多いようです。（もちろん祝福師の祝福は，教会員の両親の間に生まれ育ったか，改宗したかにかかわらず，あらゆる年代の会員に与えられるものです）

祝福を受ける備え

祝福師の祝福を受けることを希望し，祝福を受けるにふさわしく，かつ準備ができていると感じている人は，監督あるいは支部長から面接を受けなければなりません。監督や支部長は，その人に祝福を受ける備えができていると認めた場合に推薦状を書いてくれます。推薦状が得られたら，直ちに祝福師と約束を取ります。自分の住んでいる地域に祝福師がいない場合は，ステーキ部長あるいは伝道部長を通して必要な手続きを取ることになります。

祝福師の祝福を受けるにあたっては，祈りと断食によって主の導きを求めるなどして，その機会を自分にとって，あるいは子供たちにとって，より個人的な思い出深いものとすることができます。ヤコブが祝福師として12人の息子たちに祝福を授けた話，中でもヨセフに対して授けた祝福を読むとよいでしょう。そうすれば，祝福文の中で使われる言葉をより身近なものとしてとらえることができるでしょう。

祝福をどのように生かすか

祝福師の祝福が成就するか否かは，私たちがその祝福をいただくにふさわしいかどうかにかかっています。主は祝福を約束してくださいますが，私たちにその祝福を受けるよう強制されることはありません。

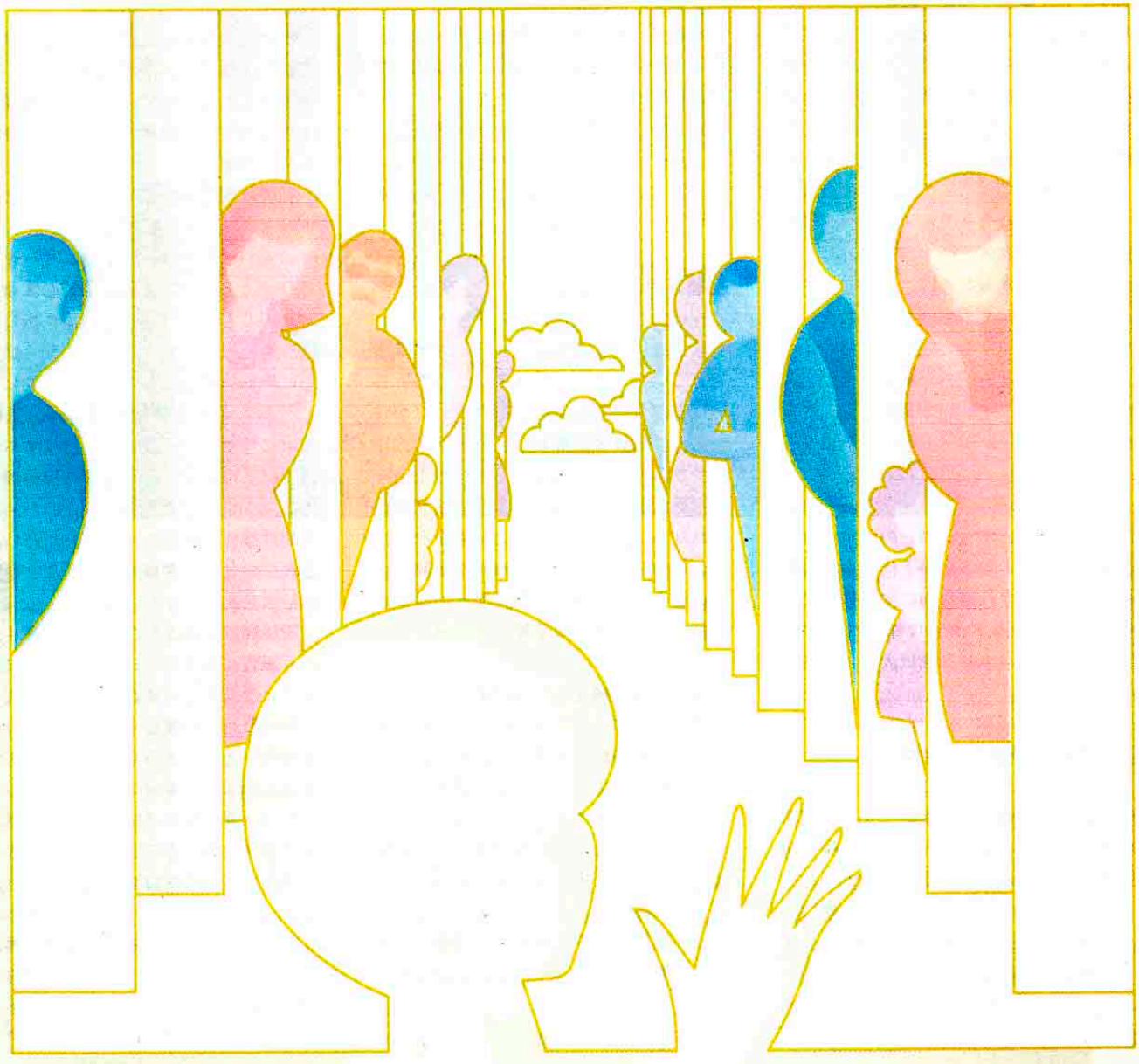
祝福師の祝福は，主から与えられる個人的な祝福です。主の戒めに従い，福音を学ぶことによって，私たちは祝福の意味をもっとよく理解することができるようになります。

受けた祝福は何度も目を通すことができるように，また家族用のファイルに保存しておけるように，余分に写しを取っておくとよいでしょう。年齢を重ねるとともに，このすばらしい祝福を祈りの気持ちをもって幾度も読み返すならば，さらに理解を深めることができるでしょう。この個人的かつ神聖な記録は，気軽に人々に見せたり，話し合ったりすべきものではありません。なぜなら祝福師の祝福は，本来，それを受ける人のために個人的に与えられるからです。ただし，ふさわしいときに家族に見せることは問題ありません。

祝福師の祝福をたびたび読み返すことは，困難に直面しているときに特に大きな力となります。それによって，天父がいかに私たちを愛してくださっているかを知ることができるからです。スミス長老は次のように勧めています。「心を乱し，悩み苦しむとき，失望したとき，人生に喜びを感じることができないときに……落ち着いて祝福文を読んでいただきたい。祝福文を読むことによってあなたは勇気づけられて出発点に戻り，再び正しい道を歩むことができる。」（1971年4月30日，ソルトレーク・インスティテュートにおける講話，pp.6－7）□

誰を恐れるの?

キャサリン・リューベック



5人の友達に，どんなことに恐れを感じるか尋ねてみてください。多分，5人が5人とも異なった答えをするでしょう。ある人は新しい友達を作ることだと言い，別の人は試験を受けることだと言うかもしれません。ときには，何かわからないものに恐れを感じると言う人もいるかもしれません。私たちの中には，友人に福音を伝えることに恐れを抱いている人もいます。あなたもそう感じたことがあるなら，テキサス州ラボック第1ワード部に所属する，15歳のアンナ・ルース・アロンに会ってみたいと思うはずです。彼女も伝道活動を始めるまでは恐れを感じていたひとりなのです。

アンナはこう語っています。「友達に教会のことを話すのが怖かったんです。でも自分がモルモンだということは，いつもはっきりと言っていました。友達はお酒やたばこに対する私の考え方をよく知っていて，パーティーで私のことをよく知らない人が私に教会の標準に反することを勧めようとしても，その人にやめるように言ってくれるんです。

私は友達に伝道して，少なくともひとりを，できれば仲間全員を教会に連れてきたいという夢を持っていました。」

夢には恐れを消す働きがあります。少なくともアンナにとっては，親友に教会のことを話したとき，そのように感じました。

「ダイアン・スワンのことはあまりよく知らなかったんですが，新学期が始まったその日からすごく親しくなって，学校からふたりで帰ったり，一緒に時間を過ごしたりするようになりました。ある日，一緒に帰宅する途中で何かが私にささやきかけたのです。『彼女に聞きなさい，……彼女に聞きなさい，……聞きなさい。』

そこで私はこう言いました。『ダイアン，実はお願いがあるの。こんなこと初めてだから，自分でもドキドキしているんだけど。私の教会の宣教師と会ってもらえないかしら。1度宣教師の話を聞いてもらえば，教会のことがわかると思うの。もちろん断わっても構わないのよ。私たちの友情には何の変わりもないわ。』

ダイアンの返事はこうでした。『いいわよ。1回だけね。でも今はっきり言っておくけれど，私は教会には入らないわよ。』」

アンナはレッスンの手はずを整え，そしてダイアンがやって来ました。レッスンにはみたまがありました。ダイアンがレッスンを続けて受けたいと母親に話したところ，母親は承諾はしてくれたものの，ダイアンは教会には入りたくなかったんじゃないのと言われました。こうしてレッスンが続き，やがて宣教師がバプテスマをチャレンジすると，ダイアンは母親の許可を得て教会に入りました。

アンナ・ルースから教会の話を聞かされたとき，ダイアンは一体どのように感じたのでしょうか。

ダイアンはこう言っています。「嫌な気はしなかったけれど，びっくりしました。家ではあまり宗教について話したことがなかったので，私が教会に興味を持ったことを話すと，母は驚いていました。弟は私をからかいましたが，母は非常に協力的で，バプテスマ会にも来てくれました。私は友達に教会のことを話すというのはよい考えだと思います。事実アンナ・ルースが私に話をしてくれなかったら，私は教会員になっていなかったのですから。話すことを恐れないでください。」

友達に伝道したいというアンナ・ルースの夢は，思わぬ方向に膨らんでいきました。

アンナ・ルースはさらにこう語っています。「私とダイアンが教会の話をしているのを聞いて，友人のドーンが自分も興味があると言い出したのです。それを聞いて，すっかり有頂天になってしまいました。ちょうどステーキ部ガールズカンファレンスがあと1週間後に予定されていて，ワード部の神権指導者の話では，教会員でない人をひとり連れて行くための特別予算があるというのです。そこで母はドーンが行けるように手配してくれました。本当にみたまにあふれた大会で，ドーンはバプテスマを受けたいと言ってきました。次の週から彼女のレッスンが始まり，数週間後にはバプテスマを受けました。」

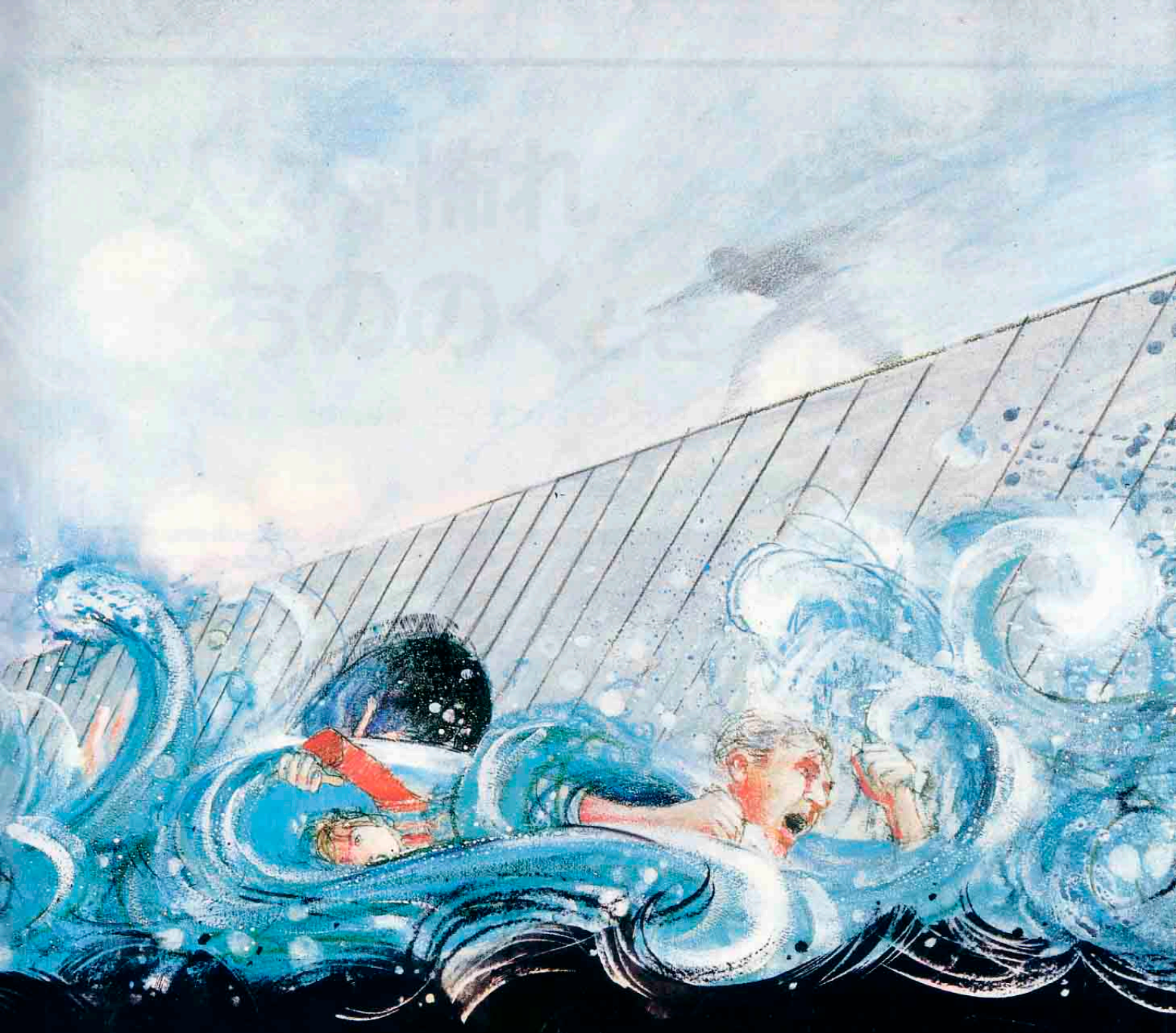
アンナ・ルースは，自分の夢がドーンのバプテスマで終わっていないことを知りました。「ドーンがバプテスマを受けるとすぐに，何年も前からの友達が日曜日に教会に行きたいと言い出したんです。」

アンナ・ルース・アロンは，今では伝道活動についてどのように感じているでしょうか。

「とても言葉では表現できないのですが，だれでもきっと胸が高鳴ると思います。私が一番うれしいのは，友達が活発な教会員になって，成長している姿を見ることです。

私は世界中の若い人たちに，自分が教会員であることを人々に堂々と知らせるよう勧めたいと思います。福音を分かち合いなさいというささやきを聞いたら，その声に従ってほしいと思います。そして自分の証を述べてください。福音を分かち合い，教会が与えてくれる大きな喜びと平安を知り，味わう機会を人々にも提供することはとても大切です。私は心から福音を愛しています。また，この先出会うすべての人々と福音を分かち合いたいと願っています。」

友達に福音を伝えることにほんの少し恐れを感じている人でも，このような変化を味わうことができるのです。□



私がアイダホ州スネーク川のほとりにたたずんだ，その夏の日の朝は，陽光がきらめき，とてもさわやかでした。私は自分を取り巻く自然の美しさと全能の神の創造のみ業に思いを馳せていました。近くには川の水を調整する水門があって，そこから灌漑用の水路に流れていく水は肥沃な農地を潤していました。

私はその風景を見ながら，静かに物思いにふけっていましたが，やがて，かなり上流から何か小さなものが流れて来るのが見えました。次第に近づいて来るのをよく見ていると，それはゴムボートでした。その小さなボートに一家族が乗っているのがすぐわかりました。川はちょうど私が立っている辺りでカーブしていて，底は深く流れは急でした。しかし本流を下るのは比較的安全で，毎年かなりの数の人々がボートで川下りをしていました。ところが，その家族がカーブのところで舵を取る姿は見るからに危な気でした。ボートは見る見る灌漑用水路に通じるコンクリートのトンネルの方へ近づいていきました。

やがてボートはトンネルのすぐ手前まで来て，今にもその中に吸い込まれそうになってしまいました。ボートに乗っていたのは若い夫婦とおばあさん，それに小さな男の子がふたりで，彼らは立ち上がって必死にコンクリートの壁に体を押しつけ，安全な方向へボートを動かそうとしていました。父親は私の方に手を伸ばして「助けてくれ」と叫びました。私もなんとかしようとして，身を乗り出し，彼の手をつかもうとしましたが，彼が必死に私の方に手を伸ばしたときに，ボートがひっくり返ってしまいました。そしてボートは5人もろとも渦巻く水にのまれて，トンネルの中に吸い込まれていってしまいました。

大変なことになってしまいました。とっさに頭に浮かんだのは，彼らがトンネ

ルの中にある流木止めの鉄柵に，ひっかかるかもしれないということでした。彼らが灌漑用水路側に出てくるかもしれないと思って，私はそちらへ回ってみました。

トンネルの中は水がものすごい勢いで流れ，３メートルほどの高さの波が渦巻いていました。泡立つ水の中からまず父親が，それから母親の姿が見えましたが，ふたりとも泳ぎはかなり達者な様子でした。次におばあさんの助けを呼ぶ声が聞こえました。彼女はほとんど泳げないようで，15メートルぐらい下ったところを流されていました。私は川岸を走って，無事に彼女を岸辺に引き上げました。

私たちは凍りつくような気持ちを感じ，川のふちに立っていました。ふたりの男の子の姿はまだ見えません。母親は大きな声をあげて泣いていました。父親は子供を見つけようとして，ごうごうと流れる川の岸辺を，行ったり来たりしていました。

そのとき１台の車が私たちの方へ向かってきました。運転をしていた人に私が事の次第を手短に説明すると，彼は車から降りて助けにきてくれました。やがて人々が集まってきました。モーターボートに乗っていた人が灌漑用水路の方を捜してくれましたが，無駄でした。そして結局ふたりの男の子は見つからなかったのです。

幸福から悲劇へ

この悲劇を目の当たりにした人々は，まったく気が動転して，どうしてよいかわからず，私も気も狂わんばかりの状態でした。川のカーブを予測できずに急流に流され，トンネルに吸い込まれてしまったというただそれだけのことで，幸福な一家が一瞬のうちに混乱と嘆きと悲しみと孤独な有様に一転してしまったのです。私は若い両親の悲しみと絶望に憔悴した表情を見て，胸をかきむしられるような思いでした。

家に向かって車を走らせる途中も，私の心は混乱していました。ふたりの小さな男の子は結局死んでしまったのです。

しかし，死とは一体何なのでしょうか。神殿の中で永遠の家族を誓い合った人々にとって，死とは一時的な別離にすぎません。私はあの悲劇に見舞われた家族がどのような人たちだったかは何も知りませんでしたが，生き残った家族が，いつの日か天父の愛と慰めと安らぎを見いだせるように祈らずにはいられませんでした。

ところで息子や娘が誘惑や悪の道に迷い込んでしまった両親はどうなのでしょうか。証や信仰，あるいは希望までも失った息子や娘たちはどうなのでしょうか。私はこれまで家族のひとりが正しい道からそれたために，幸福な家族が惨めな有様になり，生涯苦しみ続ける姿を何度もこの目で見てきました。

正しい選択をする

若人の皆さん，あなたがたは目まぐるしく変動している世の中に生きています。確かな判断と正しい選択がぜひとも必要です。あなたがたの将来は，今どのような選択をするかにかかっているのです。悪につながる道は絶対に避けなければなりません。

ちょっとした不注意や気の緩みから罪が忍び込み，あなたとあなたの愛する人々の人生に，混乱と嘆きと悲しみをもたらすこともあります。福音に従い，自分に求められている義務を果たすのを，自由を失うことだと考え，「自分らしくありたい，自由でありたい，福音の規則や決まりに縛られたくない」と主張する人々もいます。

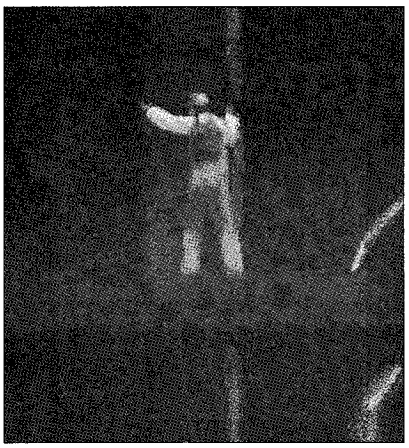
そのような人々を，「鉄の棒」（Ｉニーファイ８：19－30参照）につかまって，神の戒めを守り，人々に福音を伝え，什分の一と断食献金を納め，聖典を学び，教会に出席し，自分も，また隣人も幸福を得られるように努力している教会の多くの若人と比較してみてください。主は言われました。「汝らわが言うところを行わば，主なるわれこれに対して責任あり。されど，汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」（教義と聖約82：10）

これは，正しい生活をする人は，神のみもとに帰り，神のものをすべて受けることができるという約束です。天父は皆さんがこの目標を達成するように望んでおられます。神はそのための道を備えられました。そして歩むべき道は明確に示されています。この世の祝福のみならず，永遠の生命の祝福さえも奪い去る誘惑の力に押し流されてはなりません。□

人々が怖れおののくとき

七十人第一定員会会員　ロイデン・G・デリック

暴力，戦争，飢饉，荒廃，自然の猛威などに関する報道が毎日のようにマスコミをにぎわしています。私たちは確かに主が予言された大いなる混乱の時代に生活しているのです。主はこう言われました。「その日，……全世界は揺れ動き，人々は怖れおののく。」（教義と聖約45：26）「人々は怖れおののく」ようになると，大きな不安にとらわれ，自信を失ってしまいます。この自信は，私たちが成功するためにはなくてはならないものです。今の時代は，友人や同僚の愛に満ちた励ましが是が非でも必要な時なのです。



そのような愛の励ましを必要としないように見える人もいますが，決してそのようなことはありません。例をあげてみましょう。ビルや橋などの建築現場で働く鉄骨組み立て職人は，はたで見るといかにも屈強で勇敢な人々です。この人たちの仕事は建物や橋の鋼材の枠組みを作ることです。彼らが建てる建造物の中には，なんと100階以上の高さになるものもあります。そしてボルトで固定した幅の狭い梁の上を歩き回るのです。橋の中には海面から数十メートルもの高さに架けられるものもあります。彼らは，やがてコンクリートの橋床とおびただしい数の車の重量を支える，この狭い桁の上を歩いて仕事をします。

彼らはいつも細心の注意を払って行動しなければなりません。一歩誤ればそれが死に直結するからです。絶えず自分の一挙一動に心を配っていなければなりません。けがや死亡に至った事故の原因をよく調べてみると，その多くが家庭の不和や心配事に端を発していることがわかりました。そうしたことで感情が不安定になり，気持ちが仕事に集中できなくなってしまうのです。彼らは危険に対して鈍感になっているのではと思う人もいるでしょう。しかし，彼らも私たちと同じ普通の人間です。その感情も関心事も責任感も性格も，ほかの人と別段変わったところはありません。ほかの人よりも優れている特性を強いてひとつあげるとすれば，自分に対して自信を持っているということでしょう。恐れを感じるようではできない仕事なのです。

ジムという熟練した職人がいました。彼はこの業界ですでに30年以上も鉄骨組み立て職人として働き，ほとんどあらゆる種類の仕事をこなして，まさに熟練の域に達した人でした。地上数十メートルのところで梁の端まではうようにして進んで，鋼材を連結してきたことも数えきれないほどありました。連結工は鉄骨職人の中でも最も優れた職人です。非常に危険で，大きな勇気を必要とする仕事だからです。ジムはその勇気と不動の精神の持ち主として，仲間たちからも一目置かれていました。

ある日のこと，ジムはコロラド州のロッキー山系の険しい山地でほかの仲間と一緒に鉄骨組み立ての仕事をしていました。そのとき，何の前触れもなく嵐が襲ってきたのです。雨が激しくなり，稲妻が走り，雷鳴もとどろき，すさまじい勢いの風が吹き荒れてきました。職人たちはすぐに持ち場から降りて，小屋に集まり，嵐の過ぎ去るのを待つことにしました。

皆が小屋に避難してから，15分ほどたったころ，だれかが「ジムはどこだい」と尋ねました。ジムの姿が小屋の中に見えなかったのです。皆で外に出て，高く組まれた鉄骨を見上げると，ジムはそこにいました。鉄柱にしがみつくようにして，梁の上に立っていたのです。皆で大声で叫びましたが，答えはありません。そこで仲間がふたり，足場を登っていってみると，ジムはまるで金縛りにあったように，まったく動けませんでした。ジムは両腕で必死に鉄柱にしがみついていたために，鉄柱から離すのにてこを使わなければならないほどでした。やがてふたりはジムにロープを結びつけてようやく地面に降ろしました。しかし，ジムは恐怖におびえきっていました。

ジムを小屋へ運び，火のそばで暖をとらせました。1時間もたつと嵐は静まり，天候も回復して，太陽も顔をのぞかせ，木々の小鳥たちもさえずり始めました。やがて仲間は仕事に戻っていきましたが，ジムは外へ出ようとしませんでした。すっかりおじけづいてしまったジムは，高い所へ登れなくなってしまったのです。

しかし現場監督にはその問題がどういうものなのか，よくわかっていました。それは決してジムが恥ずかしく思うようなことではありませんでした。どんな熟練工にも起こり得ることだったのです。事態の解決のためには，賢明な判断に基づく思いやりと心配りが必要でした。も

もしここで高い所に戻っていかなかったら，もう二度と戻ることはできないでしょう。嵐の猛威と危険な仕事へのおびえが，ひとりの熟練工の気をくじいてしまったのです。ジムひとりでもこのつまずきから立ち直ることができるかもしれません。しかし今のジムには，これまでにも増して強い助けが必要だったのです。

この賢明な現場監督はジムの肩に手を回すと，ジムに起きたようなことはだれにでも起きる可能性があるんだ，と諭しました。そして，ジムに仕事に戻るように言い，また自信を取り戻して仕事ができるようになると約束してくれたのです。ジムは監督の言うことが正しいことはわかっていました。仲間の職人たちもジムが戻らなければならないことを知っていました。その日のうちに戻らなかったら，その次の日にはもっとむずかしくなるでしょう。そして1週間もしないうちに，二度と戻れなくなってしまうのです。ようやくのことで，ジムは鉄骨の上に戻って仕事をする決心がつきました。まだ足元はふらつき，体は震えていました。そしてジムが慎重に鉄骨を登って現場まで戻ると，仲間たちが次々に「頑張れよ」と激励の言葉をかけてくれました。お陰で，ジムには必要な力と自信がよみがえってきたのです。

ジムは仲間たちのペースに合わせようと頑張っているうちに，だんだんと自信を取り戻してきました。もし現場監督が無理解で，仲間たちが冷たい態度をとっていたとしたら，おそらくジムは仕事に戻れなかったことでしょう。ジムは，仲間たちが本当の友達なんだということをしみじみと感じました。彼らは，自分が本当に苦しんでいるときに励ましを与えてくれたのです。

数多くの経験を積み，しかも勇気と自信に満ちた人生を送ってきた人が，このように恐怖に負けてしまったのは，一体何が原因だったのでしょうか。医学の専門家は，ジムの症状は極度の不安の現われである，と言っています。「不安とは不快な緊張の高まっている特殊な状態をいう。この緊張は何らかの危険の存在が原因でもたらされるものである。危険が現実のものとなったとき，それは恐怖となる。その危険がまだ想像の段階にあるとき，これを不安（意識しているいないにかかわらず，恐ろしいものを空想している状態）と呼ぶ。」（「心身医学」 p.22）

混乱し，しかも葛藤の多い現代社会の中で，多くの人々は心の安定を失い，不安や恐怖におののいています。私たちが心の安定と自信とを取り戻そうと努力するときにぜひとも必要なのは，その手をやさしく肩に回して，「ひとりじゃないんだから」「必ず戻れるから」と勇気づけてくれる友人です。しかし，私たちは，愛と心からの関心を示して励ましを与えるとは逆に，心ない言葉や無理解によってそのような人を傷つけてしまうことがよくあります。

救い主はその愛と関心について，たとえ話の中で次のように教えられました。「人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき，彼はその栄光の座につくであろう。

そして，すべての国民をその前に集めて，羊飼が羊とやぎとを分けるように，彼らをより分け，羊を右に，やぎを左におくであろう。

そのとき，王は右にいる人々に言うであろう，『わたしの父に祝福された人たちよ，さあ，世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。

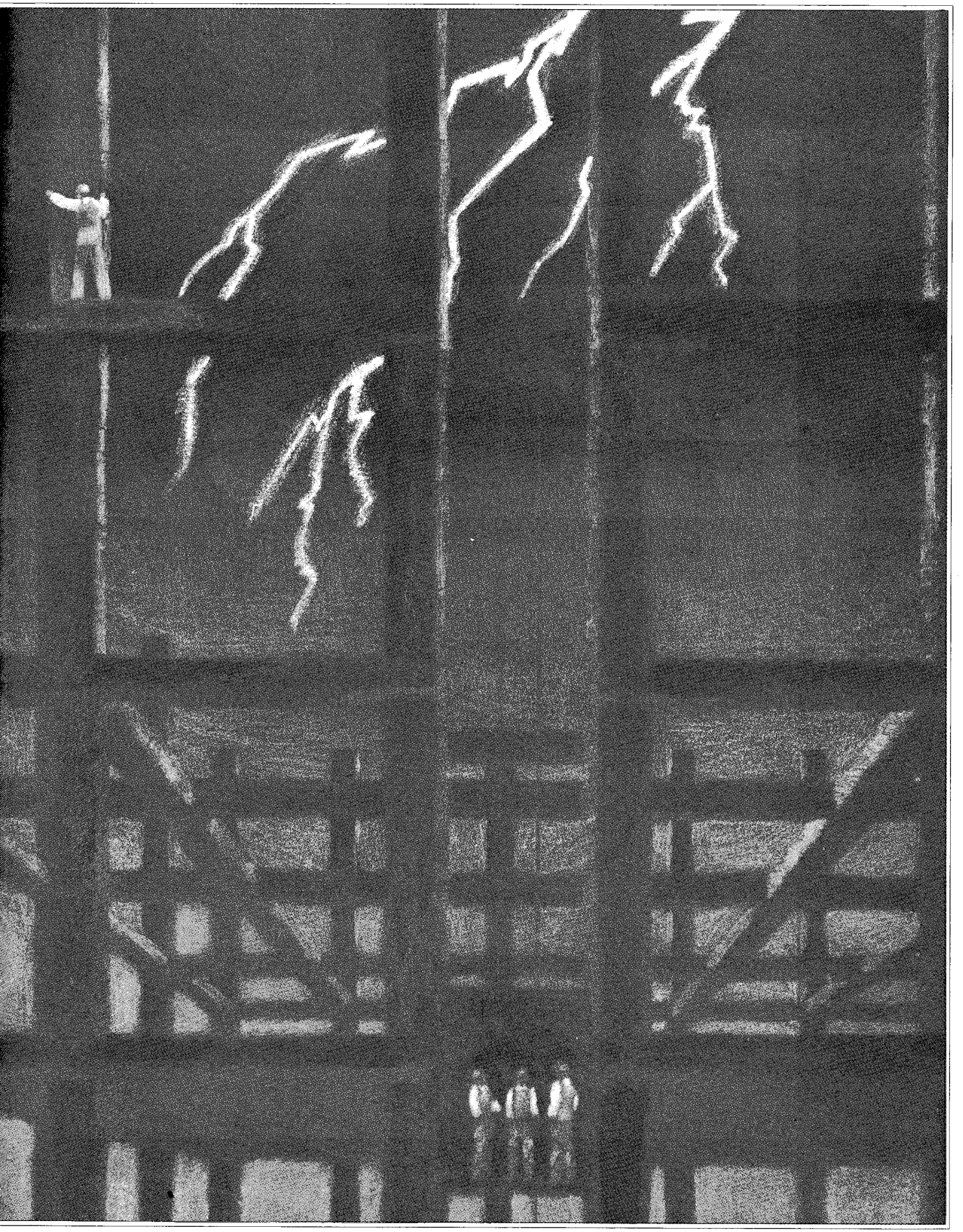
あなたがたは，わたしが空腹のときに食べさせ，かわいていたときに飲ませ，旅人であったときに宿を貸し，裸であったときに着せ，病気のときに見舞い，獄にいたときに尋ねてくれたからである。』

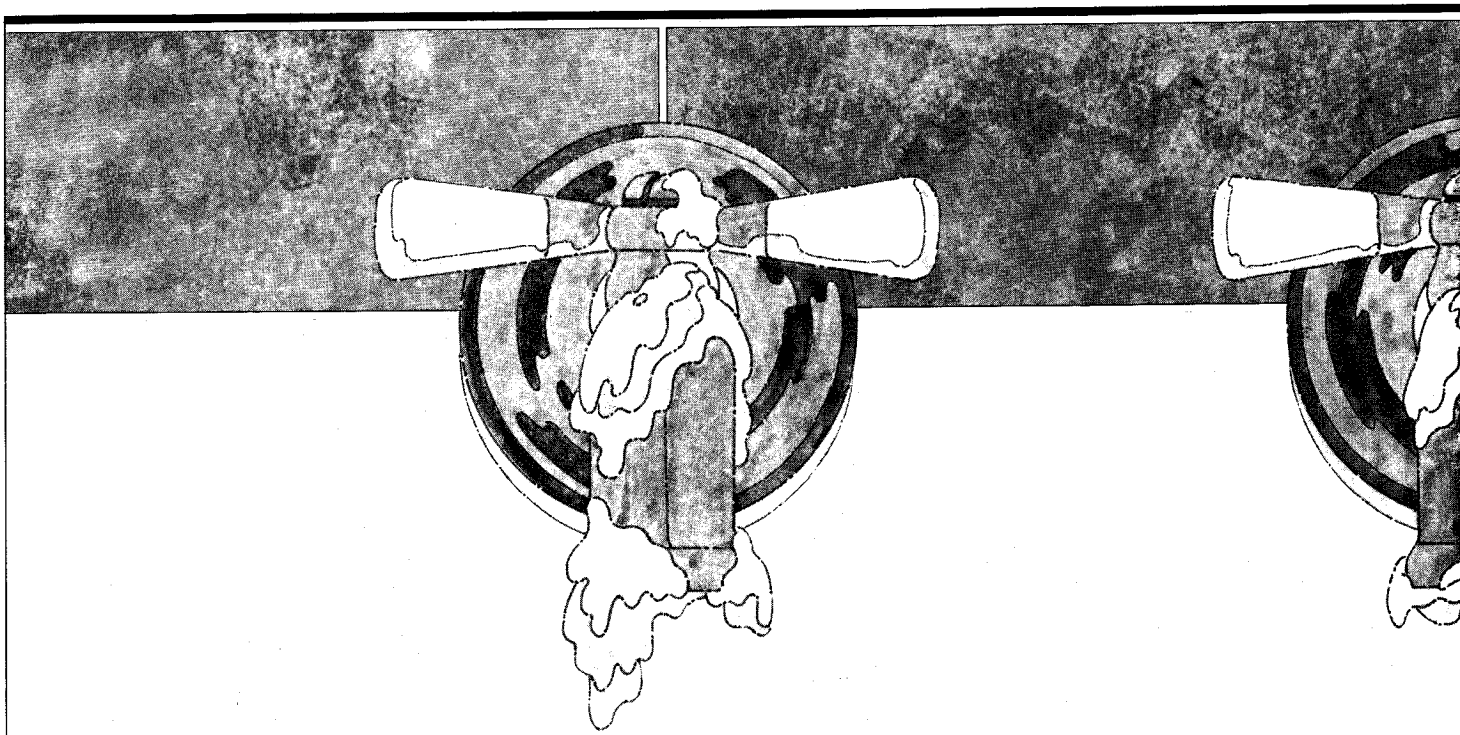
そのとき，正しい者たちは答えて言うであろう，『主よ，いつ，わたしたちは，あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ，かわいているのを見て飲ませましたか。

いつあなたが旅人であるのを見て宿を貸し，裸なのを見て着せましたか。

また，いつあなたが病気をし，獄にいるのを見て，あなたの所に参りましたか。』

すると，王は答えて言うであろう，『あなたがたによく言っておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは，すなわち，わたしにしたのである。』」（マタイ25：31－40） □





この年の冬はこの地方でも何十年かぶりの厳しい寒さに見舞われ，雪が舞い，気温は日増しに下がっていました。やがて地面は固く凍りつき，川も凍り始めました。

南フランスで伝道していたときのことです。私は暖かい冬と心地よい夏の気候を期待してこの地方へやって来ました。ここではどこもそうなのですが，私たちのアパートも温暖な気候に合わせて建てられていました。壁に断熱材は使用されておらず，建物の外壁をつたう水道管にはテープが巻かれていませんでした。その方が経済的でしかもこの地方はそれで十分なのです。

日増しに募る寒さに比例して，人々の応対も段々と冷たくなるようで，私たちを受け入れてくれる人も次第に少なくなっていきました。伝道はますますむずかしくなってきました。

やがて町の中心部で水道管が凍りつき，人々が水のない生活を強いられていることがわかりました。凍結は疫病のように広がり始め，私たちはこちらの方まで来ないようにと願うばかりでした。心配しながら事態を見守っていた私たちですが，ある朝目を覚ますとアパートの水道管は冷たく凍りつき，一滴の水も出なくなっていました。アパートのほかの住民はほとんどが近隣に家族や友人がいるか，あるいは裏庭に井戸を持っていました。もちろん私たちはそのような幸運とは無縁でした。

私たちはお店で売られている高価なびん詰めの水を買って，この難局をしのごうと懸命でした。毎朝，水の使える教会まで20分の道のりを歩いて洗面や食事の準備に通いました。しばらくすると，洗いものと緊急用にバケツ1杯の水を確保しておくべきだと思いました。そこで準備の日に時間をとって，まだ水が出る家を探し，水をもらおうと決めました。

やがてバケツ1杯の水を懇願する私たちが出会ったのは，いつも伝道のときに経験する，人々のあの冷たい態度そのものでした。私たちの願いに対して，凍てつく風のように冷ややかな返事が人々から返ってきました。私たちが受けた返事のほとんどは次のようなものでした。「もしあなた方にうちの水をあげてしまったら，私たちは何を飲めばいいんですか。あげてしまえばそれだけ私たちの分が少なくなるんですよ。」

落胆しないでいる方が無理でした。時間がたつばかりで，一向に水はもらえません。私たちはあきらめて帰る前にあと1軒だけ訪ねてみることにしました。

私たちはドアをノックしました。この日の出来事を私たちの普段の伝道と比べてみるのはおもしろいことです。人々は私たちが伝えようとしている福音の大切さを理解していません。こちらが紹介する事柄にまったく関心を示さないのです。彼らの頭にあるのは，自分たちが忙しいということと，ふたりの女性の宣教師，それもすその長いコートを羽織って黒いネームプレートをつけ，外国から来た見ず知らずの相手にわずらわされたくはない，ということだけでした。

ドアが開くと婦人がひとり現われ，私たちが自己紹介をして困っていることを話すと，彼女は心配そうにこちらを見つめていました。やがて彼女の返事が返ってくると，最初は今までの答えと同じように聞こえました。「バケツ1杯の水ですって？」そしてこう尋ねるのです。「バケツ1杯の水って，たったそれだけでいいの？　2杯でも3杯でも，10杯でも，それ以上でもいいのよ。何杯でも取りにいらしてくださいな。お水をあげれば水道管は凍らないでしょう。水は流れている間は凍らないものよ。つまりあげればあげるほど，私の方もそのおかげで水が使えるようになるってことなのよ。」

遠く離れた異国のこの女性は，次のような主の教えを実践していたのです。「あなたがたは，わたしが空腹のときに食べさせ，かわいていたときに飲ませ，旅人であったときに宿を貸し……てくれたからである。」（マタイ25：35）□

バケツの水

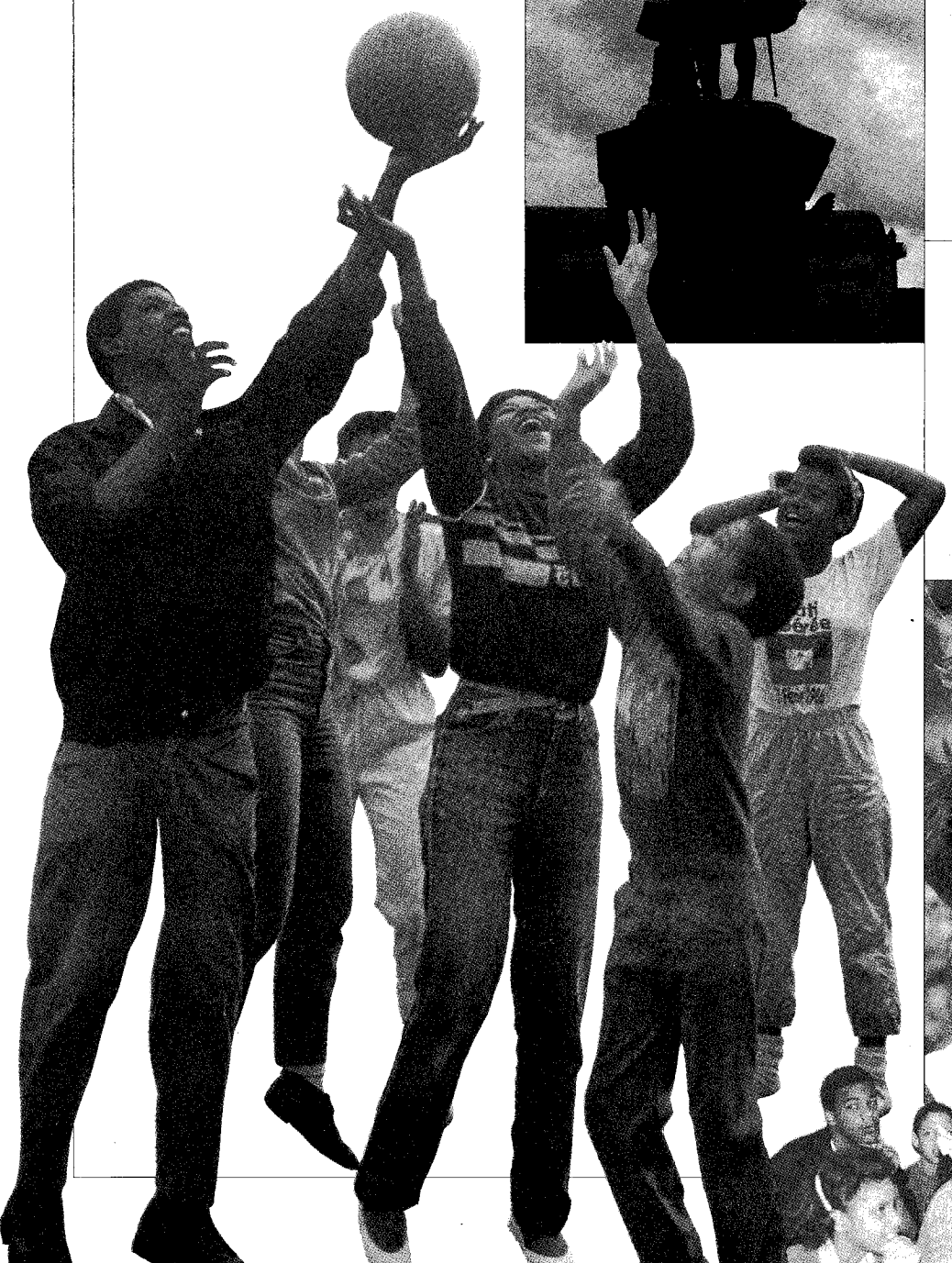
スー・ドレイパー

私たちの願いに対して，凍てつく風のように冷ややかな返事が人々から返ってきました。落胆しないでいる方が無理でした。

信仰の国

早朝セミナリーが行なわれている，ドミニカ共和国の首都，サント・ドミンゴ市の上空を雷鳴がとどろき，稲光りが走っています。クラスのだれかがろうそくを取りに席を立ちました。しかし，聖典についての熱心な話し合いは途切れることなく続いています。教室の屋根に打ちつける大粒の雨の音に負けずに，生徒たちの聖句を読みあげる声が高らかに聞こえてきます。

でも，ちょっと待ってください。教室は真っ暗で，生徒たちは本の字が見えな



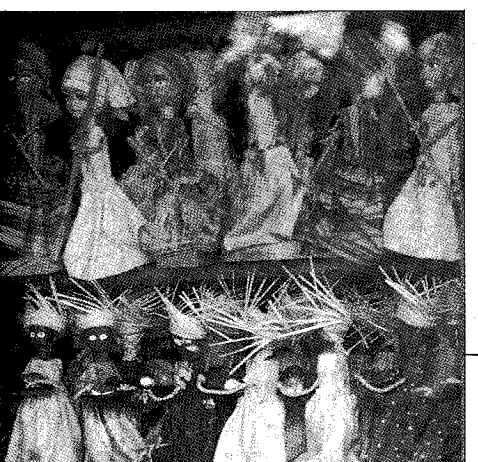
ドミニカ共和国の若人たちに注がれる永遠の福音の光

いはずです。——そう，彼らは読んでいるのではなく，それまで覚えた聖句を暗唱しているのです。彼らは聖句を一日に10カ所ずつ暗記しているのです。

ドミニカ共和国における教会のほとんどの若人に，この種の勤勉さと熱心さが見られます。彼らにとって教会は日曜日だけのものではなく，それ以上の意味があります。セミナリーは，単なる早朝に行なわれるプログラムというだけではありません。彼らにとって福音は，生活を導く力強い原動力なのです。彼らは日常生活に福音の教えを取り入れることに非常に熱心です。

たとえば，ある十代の少女はどうしても早朝セミナリーに参加したいと思っていましたが，両親はそれは大きな負担になると考えて反対しました。そして彼女に，家の仕事をたくさん言いつけて，それを終わらせてからでないとセミナリーに行ってはいけないと言い渡しました。ところが驚いたことに，彼女は毎朝4時に起き始めたのです。そして家の仕事を全部片づけてからセミナリーに出席するようになりました。

また，ぬかるみの道を30分もかけて毎朝歩いて通ってくる生徒もいます。それでも決して遅刻はしません。それだけの時間と労力をかける値打ちがあると信じているのです。オーサーマワード部のウォーリイ・ベントゥーラはこう語っています。「ぼくたちは教会を愛しています。教会に心から感謝しているんです。どんなに感謝しても，感謝しすぎるなんてことは決してありません。」



大半の若人が，このベントゥーラと同じ気持ちでいます。放課後になるとワード部の若い人たちは，バレーボール，バスケットボールなどのスポーツや，讃美歌の練習をしたり勉強をするために近くの教会堂に集まってきます。夜になると，夕食の後，若人たちは専任宣教師と一緒に伝道するか，「ノーチェ・デ・アミースタード」，つまり「フレンドシッピングの夕べ」と呼ぶ会を開きます。このような求道者のためのフェローシッピングプログラムは，ワード部の会員たちで経費を賄(まかな)っています。青少年は，映画を上映したり，証会をしたり，話し合ったり，ゲームに興じたり，リフレッシュメントなどを用意して，求道者が教会に親しみを持ち，違和感を覚えることのないように努めています。すべての活動を青少年だけで計画することもよくあります。

ドミニカ共和国で教会が組織されてから9年がたちましたが，現在では，会員数は1万1,000人を超えています。1カ月に300人以上のバプテスマがあることも珍しくはありません。

さて，伝道のみ業がこれほど成功を収める，力強い若人たちの住む場所とは一体どんなところなのか，詳しくみてみましょう。

ドミニカ共和国は，イスパニオラ島にあって，ハイチ国と島を二分しています。そして，メキシコ南端の西方，ベネズエラの北方に浮かぶ，西インド諸島の中の熱帯地方の島のひとつです。

天候の穏やかな時節になると，温暖な地方の国々によく見られるように，サポテ，グワナバナ，レチョーサー，グラナデーヨーなどと呼ばれる果実や野菜が，島のあちこちにある露店市に並び，人々は買い物を楽しみます。

色鮮やかな家々は，そよ風だけではなく，隣近所の人々や親族を招き入れるために十分な広さを取って建てられています。近隣同士の付き合いも非常に親密で，家々は軒先が触れ合うほど近く隣り合って並んでいます。

このような住宅事情の特色は，伝道活動にも幸いしています。たとえば宣教師がある家の前に立つと，宣教師がそこに来ていることが近所の人すべてに知れます。ある家族で家庭集会が始まれば，周辺の人々は好奇の目を向けてきます。教会に入ったある少女は，隣の家の人々がモルモン経を勉強している様子を窓ごしに何度も見ているうちに，教会について興味を持つようになったと話しています。彼女にとっては，あとはただ隣の家の人々が何を読んでいるのか確かめればいいだけでした。

ドミニカの十代の若人には，教会について話す機会が次第に増えています。教会員が急激に増えているために，末日聖徒の数が30人にも達する高校が何校かあります。教師から注目を集め，「ロス・モルモネイス」，つまりモルモンについて，それがどのような宗教であるか授業中も質問を受けています。必ずしも好意的で簡単な質問ばかりというわけではありませんが，若人たちは，祈りと霊感によってそのほとんどに答えているのです。そして放課後になると，彼らは大勢の生徒から様々な別の質問を受けることになります。

ドミニカの人々は，大抵は開けっぴろげで，気さくな人たちです。また自分たちの先祖から受け継いだものをとても誇りに思っています。クリストファー・コロンブスは，新世界を求めて航海し，この島にたどり着きました。

首都のサントドミンゴは新世界の中では最古の都市であり，ドミニカ共和国は新世界における最初の大学を擁しています。

スペイン人が最初にこの地域に侵入してから，土着のインディアンが絶滅に近い状態となり，生き残ったわずかな人々の手によって，レーマン人の遺産が現在ドミニカの人々の一部に伝わっています。さらに，フランスが一時島を支配していたとき，プランテーションで働かせるために奴隷を島に移住させました。今日のドミニカの文化は，スペイン，先住民のインディアン，フランス，そしてアフリカからの影響を色濃く受け継いでいます。

この種々の文化が混ざり合い，実に見事な生き生きとした国民舞踊を作りあげました。それがメレンゲです。この踊りはパートナーを必要としませんが，教会の活動には頻繁に取り入れられています。ドミニカの人々はちょうど笑顔が自然に出てくるように，自然にメレンゲを踊ります。それほど生活の中に溶け込んでいるのです。

興味深いのはこのメレンゲの音楽やダンスが，ドミニカの十代の若人に独特の試練を課しているという点です。メレンゲの勝れた演奏グループは，大抵日曜日にコンサートを開いているのです。教会の若人たちは週日にメレンゲの音楽をよく聞きますが，日曜日にはラジオを消しています。

このような献身は，やがて若人たちが目標を達成するためのよき準備となります。「ぼくは伝道に出たいのです」とメンドーサ支部の17歳になる少年，ジョニー・ウビエラは語っています。彼はセミナリーで学んだり，聖典を読んだり，専任宣教師と一緒に働いたりして，多くの時間を伝道に出る準備のために使っています。この国では宣教師の半数近くが自国の専任宣教師であり，その割合はさらに伸びています。

ペドロ・ロドリーゲスは，バプテスマを受ける前から伝道に出たいと思っていました。彼は自分の改宗についてこう語っています。「ぼくは友達と一緒に教会に来たんですが，とても感動しました。それからぼくは自分で聖典を読み始め，伝道に出たいと思ったんです。そして，この書物の中に記された教えを人々に伝えたいと思いました。その後，間もなくしてぼくはバプテスマを受けましたが，今は伝道に出る日を楽しみに準備を進めています。」

もちろん，教会員になるのは必ずしも簡単なことではありません。ほとんどの場合，両親や兄弟姉妹などの肉親や友人からの理解は得られません。「一番むずかしいのは，友達に知恵の言葉に従う理由を説明することです。ここではたばこを吸ったり，お酒を飲んだり，麻薬に手を出すことだって普通に行なわれているんです。そういう人たちからよくからかわれるけれど，私は平気。オレンジジュースで満足しています」とセール・ベントゥーラは語っています。

ルイス・エスピナルは，こうした仲間からの圧力に対処するために，ひとつのユニークな解決策を持っています。「何か悪い習慣を持っている人は，それを取り除きたいと思っているものです。でも，彼らはどこからもその助けが得られないと思い込んでいるんです。私はそのような人たちと心からの友達になって，みんな教会に連れて来るようにしています。教会に来なくなる人もいれば，来続ける人もいますが，その中から改宗者が誕生することもあります。」

ドミニカ共和国のどこに行っても，人々に手を差し伸べたいと願っているこのような十代の若者たちと出会うことができます。事実，世界中の若人に自分たちのことをどのように伝えてほしいか尋ねると，ドミニカの若者たちからは次のような答えが返ってきます。

「世界中の若人に私たちの愛を伝えてください。いつの日か会えるのを楽しみにしていますと。」

「私たちは皆同じ仲間だと伝えてください。」

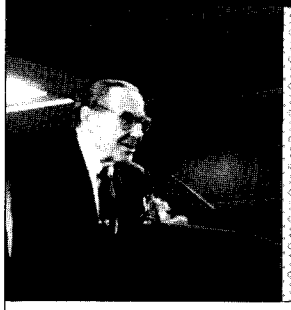
「この教会の会員であることは本当にビーエン・チェーベーレ，すばらしいことです。私たちがそう思っていることを知らせてあげてください。」

「教会は私たちの生活でとても大切な役割を果たしていると伝えてください。ほかの地域の末日聖徒の若い人たちと，生活様式やそのほかの点で少し違ったところがあるかもしれませんが，同じ人生の目標と夢を抱く仲間であることを知ってほしいのです。」

「この教会が真実であり，神が私たちすべてを愛しておられることを私たちは知っています。このことを皆さんに伝えてください。救い主は私たちのために偉大なみ業を果たし，私たちの罪の代価を支払ってくださいました。そして主は私たちに光を与えてくださいました。ですから，周囲の人々にもそれがわかるように，私たちの光を輝かそうと努力しています。」

ドミニカ共和国のセミナリーの生徒たちが停電の中でも「見る」ことができた光――それはキリストの光だったのです。真理を知らされたときに，それを受け入れることができたのも同じ光のためでした。彼らを伝道とフレンドシッピングに駆り立てるのもやはり同じ光です。彼らはこの光によって情熱をかき立て，信仰の「共和国」を築いているのです。□

各地のたより



七十人第一定員会会員
ロバート・L・シンプソン長老を迎えて
――東京南ステーキ部特別ファイヤサイド――

去る2月12日金曜日，東京神殿別館において，七十人第一定員会会員のロバート・L・シンプソン長老ご夫妻をお迎えして，東京南ステーキ部のファイヤサイドが開かれました。

シンプソン長老は，神殿職員への指導などをされる責任にあり，今回は，アジア各地の神殿を訪問される途中の来日でした。初めにシンプソン姉妹がお話をされ，「イエス・キリストが弟子の足を洗う話にもあるように(ヨハネ13章参照)，指導者となるべき人は，謙遜な心をもって人々に仕えなければなりません。イエス・キリストは私たちにその手本を示してくださいました。私たちは自分自身を捨て，人のために尽くすときにイエスに近づくことができるのです」と，無私の奉仕の大切さと，みたまに対する感受性を養うこと，聖霊の導きに正しく従うことができるよう，一人一人が訓練する必要があることを強調されました。

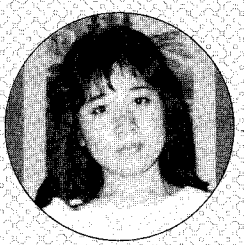
次にシンプソン長老がお話をされました。「神殿は天に至る門です。永遠の生命への道がはっきり示されています」と神殿の神聖さ，重要さを語られ，また「キリストの光」(教義と聖約88：7)について話されました。「このキリストの光は，すべての者の中にあり，すべての者に生命を与え支配しています。世界を組織し，国々を指導し，また奇跡を行なう力でもあるのです。」鉄のカーテンの向こうであっても自国に神殿を建設した東ドイツの聖徒たち，先祖の家系図をすべて暗記しているニュージーランドの原住民マオリ族など，キリストの光によって導かれた人々が多くいることを，経験を通し紹介してくださいました。

「ある夜，私はほかの教会の方から電話をいただきました。それは，彼の教会の牧師が急病で説教ができなくなったので，代わりに話をしてほしいという依頼でした。当時，伝道部長の責任にあった私は，快くそれを承諾し，当日たくさんの宣教師たちをつれて会場へ向かいました。7,000人の聴衆を前に，それとなくモルモン経から聖句を読みあげると，彼らは感激し，一斉に『ハレルヤ』と叫んだのです。キリストの光は，すべての人々に真実を証するのです。」

シンプソンご夫妻は，2月13日，次の訪問地であるハワイへと旅立たれました。

(取材：編集部)

伝道によって知った両親の愛



岡山伝道部専任宣教師　西山香緒利

私は小さいときからずっと両親に対して反抗的でした。家が商売をしていた関係上，両親は朝早くから夜遅くまで忙しく働いていたこともあって，私は両親の愛に飢えていました。その一方で両親の欠点ばかりが目について，接することさえ嫌っていたのです。しかし，そのような私でも伝道に出たいと強く望むようになり，それが確かに主のみこころであると確信するようになりました。

それ以来様々な問題を経験しましたが，6年以上もの年月を経て，やっと伝道に出られる状況となりました。しかしこの6年間も両親と接する私の態度は改まるどころか悪くなる一方で，同じ屋根の下に住みながらできるだけ顔を合わせないようにしていました。そのうえ，伝道に出たいという思いも打ち明けずにいましたので，伝道に出る前の2，3カ月は，いつ両親にそのことを話そうかと，そればかり悩んでいました。突然そのような話を聞いたら両親は一体どう思うだろう。もちろん激怒するだろうし，あるいは勘当されるかもしれないと思いました。

私は断食と祈りを続け，主に助けを求めました。確かに伝道が主のみこころである

という確信を持っていましたので，勘当されるのを覚悟で，ある日意を決して自分の思いを伝えました。翌朝，父は私に手紙で返事をくれました。それは私にとって奇跡以外の何ものでもありませんでした。そこにはこう書いてありました。「お父さん，お母さんの分まで伝道しておいで。お父さんは，香緒利は多分伝道に出るだろうと思っていました。香緒利が成長することなら……。」

私はその手紙を握りしめ，両親への感謝と喜びに感極まる思いで長い時間泣き続けました。伝道に出ることにより，天父は両親がいかに私を愛してくれているかを教えてくださいました。私は今まで感じることのできなかった愛をひしと感じました。それまでの両親への悪い思いは完全にぬぐい去られ，ただただ感動と愛の思いでいっぱいになりました。そして自分の今までの態度を心から反省し，伝道地へ赴きました。

ある安息日，伝道を終え，帰還しようとする宣教師をアメリカから迎えにきた彼の父親が，聖餐会でお話しされました。「私は2年前，自分の息子をMTC（宣教師訓練センター）へ連れていくとき，本当につらかったです」と。それを聞いて私が伝道に出るときに母の見せた涙を思い出しました。伝道地へ赴こうとする私の後ろ姿を見て，両親はどれだけ寂しく思ったことでしょう。それを考えるだけで胸が締めつけられる思いがしました。伝道に出て，両親への思いがこんなにまで変わるとは思ってもいませんでした。多くのすばらしい人々と出会い，日々幸せな思いに満ちあふれて伝道しています。しかし，その陰には両親の愛と助けがあることを私は決して忘れません。

伝道に出ることは，ときとして家族や自分自身の大切なものを犠牲にすることがありますが，それらを犠牲にするだけの価値のある何にも代えがたいすばらしい機会です。そして主の僕として働くとき，それらの犠牲が必ず祝福に変わることを証します。

いつの日か，私の両親や家族みんなで天父のみもとへ帰ることが私の心からの望みです。愛する同僚たちや求道者，伝道部長ご夫妻と宣教師たち，そして兄弟姉妹や私の家族一人一人に心から感謝しています。また，このようなすばらしい人々を通して多くのことを教えてくださった神様に心から感謝しています。（**にしやま・かおり**　1962年生まれ，熊本地方部長嶺支部，本年1月に帰還）

神の恵み

名古屋西ステーキ部岐阜ワード部　古川　誠

●古川ご家族

私は身障者です。教会を知ることになったのは，友達に会う事がなかったときだと思います。私はそれまで何度も同じ所を通っていました。しかし，そのときは少し変わっていました。外人が大きな白い紙に日本語で何かを書いていまして，その周囲に会員がいました。少しのぞきましたら話しかけられ，教会の方に歩きながら聞きました。何を聞いたかって，それは人を変えられますかと。その人は自信をもって言いました，できますと。心の中でこれだと思いました。

レッスンの約束をしましたが，時間がきても中に入るのをためらいました。どうしようかとうろうろするだけでした。時間がせまってくるし，ドアの所まで行っては引き返し，そんな事を繰り返していました。選択を間違えていたらどうなっていたでしょう。いろいろありましたが，バプテスマを受けました。教会員になれて嬉しい思いがありました。

それ以来，教会員としての生活が始まりました。しかし，少しの期間は教会には行きませんでした。

あるときハガキが来まして教会に来てくださいと書いてありました。それ以来，教会に集うようになり，ハガキをくれた人に感謝しています。

あるとき，自分の不注意により，事故をしました。それまで不便な体でもなんでもしていました。それが，事故を境にとんだり，はねたり，かけっこしたり，できなくなり，歩くのもいやになるほど不便になり体の安定感が悪くなってしまいました。

なさけなさと，くやしさと，みじめさで，いつも心がすっきりしない時期を過ごしていました。

そのころ，父が倒れて入院することになり，どうしようもない時期でした。教会の責任は解任され，なんとかもっていた心のはりがなくなり，ふんだりけったりでした。「どうしよう，これからどうしよう，どうすればいいんだ，まさかこんなことになるとは思っていなかった。」

しかし，聖書を読みパウロの書いた中で恵みは十分なりと書いてあるところが目に入ってきて慰められました。（IIコリント12：9参照）恵みが十分なり，その言葉でなんとか持ち直しました。これも神様の恵みのおかげです。

今は，家族を持っています。恵まれています。たくさんの人たちに助けられながら過ごしています。これも神の恵みです。これからもあきらめずに信仰生活を続けます。（**ふるかわ・まこと**　1952年生まれ，長老定員会第二副会長）

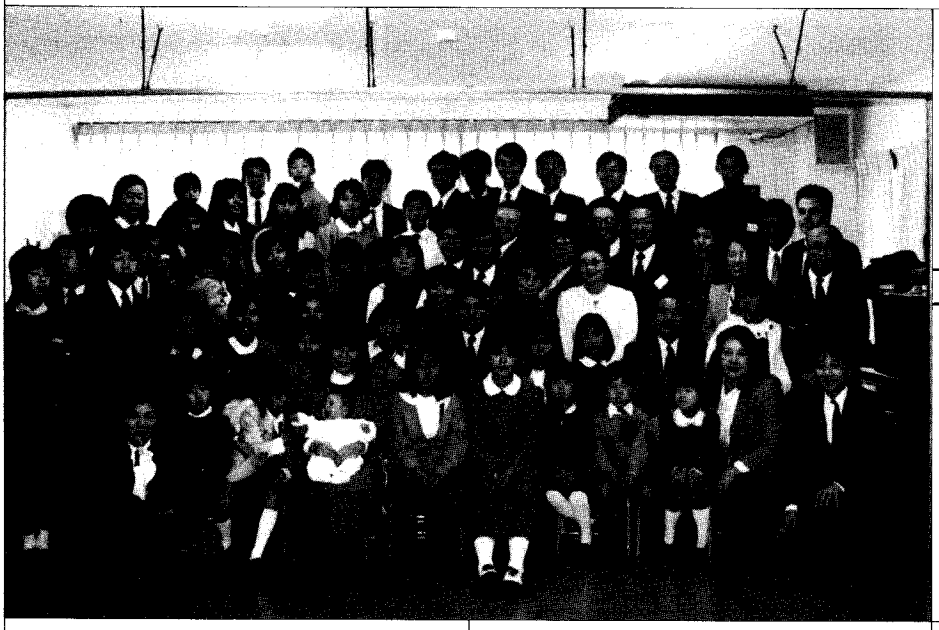
ワード部/支部特集②

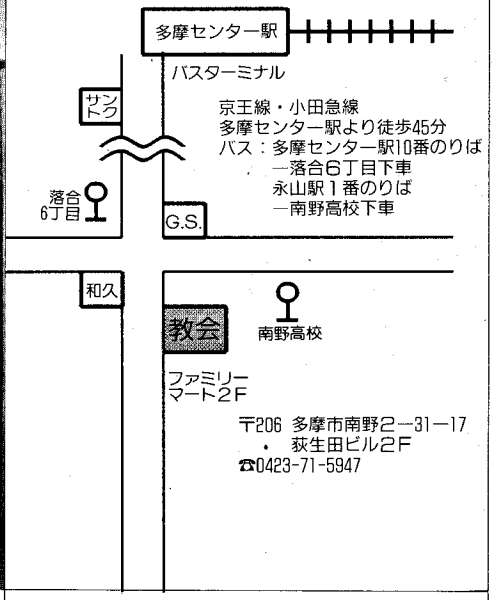
緑のニュータウン

東京西ステーキ部

多摩ワード部

●全国各地のワード部／支部をご紹介するコーナーです。





1987年11月15日，多摩支部大会の聖餐会で宮脇ステーキ部長により「本日をもって，多摩支部は多摩ワード部となります」との発表がありました。私たち多摩の会員だれもがワード部になることを待ち望んでいたので，この主の恵みと祝福に感謝の気持ちで胸が熱くなりました。

多摩支部として，人口13万人の多摩ニュータウンの中心地に，ユニットが組織されたのが6年前の1982年。宣教師も含めて35人足らずの会員により2室の小さな集会所から，多摩ワード部の歴史はスタートしました。ニュータウンでの伝道は一見容易なようですが，宣教師が戸別訪問をしてもほとんどの人がドア越しに答えるだけで，目と目を合わせて話すことすらできません。宣教師たちがこの人口密度の高い多摩の丘陵地帯を，一生懸命に自転車をこぎながら伝道しているにもかかわらず，なかなか求道者を見つけることができませんでした。ある年などは年間を通じて改宗者がふたりという状況でしたが，そのようなときでも，すばらしい家族や独身の兄弟姉妹の家庭的な温かさに満ちていました。

しかし，神様はこのすばらしい兄弟姉妹の集う多摩支部に，よりたくさんの試練をお与えになりました。

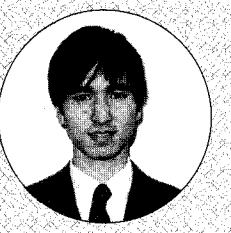
今から約4年前のことですが，私たちの多摩支部に，待望の教会堂建設用地が与えられました。駅から近くとてもすばらしい場所でした。ところが，その後すぐに教会にとって好ましくない建物が隣接して建ち，建築計画は暗礁に乗り上げてしまいました。また，今までの集会所ではどうしても狭くなり，市のはずれに位置する今よりも広い場所に集会所を移しましたが，そこは，駅からさらに遠くなり交通の便が悪くなってしまいました。

多摩支部の4人目の支部長で，現ワード部の監督である佐々木利実兄弟は，そのときの多摩支部の状況を次のように語っています。

「もうすぐ建物が建ち，霊的な集会ができると希望に満ちていた会員たちに『教会堂の建設はしばらく延期します。また今の場所も狭くなったので，当分の間，別の場所に移って集会を開くことになりました』と発表したとき，みんなは失望を隠しきれない様子でした。でも新しい場所に移り，祈り，断食，系図，神殿と一致して主の業に励むようになりました。その結果，求道者や転入会員も増え，50人ほどの活発会員が1年足らずで85人に増えました。こうして各組織の活動も活発になり，主のみ手が確かに多摩の上にあるという証をいただくことができました。また，会員一人一人が聖められ，主のみ業をより早く進めることができるようになりました。」

広くなったはずの集会所もすぐ手狭になりました。多摩ワード部全員の一致は強くなり，信仰はひとつとなりました。一度はあきらめかけていた建築用地も再び与えられ，今ではすべての会員が毎日，伝道と教会堂建設のための祈りを捧げています。まさに多摩ワード部は，これまで以上に輝き始めたのです。

改宗から13年目に思う



小山 典生

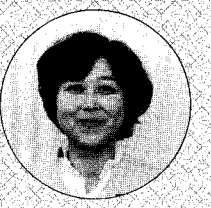
私が教会に改宗したのは中学2年生のときでした。兄が英会話を習いに教会へ行ったのがきっかけで，宣教師が家に来ました。そして，母と3人でレッスンを受け始めましたが，何回かレッスンを聞いて母は悩み出し，次のレッスンのときに断わることになりました。私も戒めについて考えたとき，この教会が偽りの教会であってほしいと望みました。しかし，私は心の中でこの教会が真実であることを打ち消すことができず，日曜日に教会へ行き，宣教師に「バプテスマを受けさせてください」と申し出ました。それが私の改宗でした。

今，教会では第一副監督として，家庭では2児の父として，会社でも忙しい日々を過ごしています。弱い私にとって，これは大きなチャレンジですが，私はいつもふさわしい指導者になりたいと望んでいましたので，神様がそのようになれるように訓練の場を与えてくださったのだと感じています。

私はできることならば，私の起きているすべての時間を主のために捧げたいと願っています。もしみこころならば，主はいつか私の思いをかなえてくださるでしょう。今はその力を蓄えていきます。また今まで私を導いてくれた多くの指導者の方々への恩返しのためにも，彼らのようになるために頑張っていきたいと思います。

伝道，永遠の結婚，子供をもうけること，そして大阪から東京へ転勤し，多摩ワード部に集うようになったことは，すべて私の信仰の成長に必要な肥料であったと感じています。これからも一歩一歩救い主に向かって進んでいきたいと思っています。(**こやま・のりお**　1960年生まれ，第一副監督)

ある日の送別会



宇田川 真弓

私は扶助協会会長として心に残る経験をしました。昨年10月のことです。

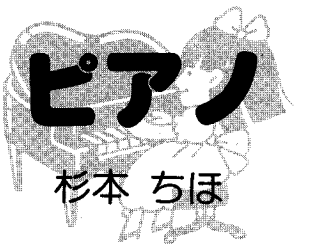
ここ1年くらい教会をお休みしているある姉妹が留学することになり，扶助協会で送別会を開く計画を立てました。その姉妹は以前，ステーキ部と支部の扶助協会でよく責任を果たしていました。最初に送別会に来てくださるようにお願いしたときには，心を閉ざしている様子で，出席したくないという返事でした。しかし，家庭訪問教師の姉妹がもう一度お願いしたところ，出発直前になって承諾してくれました。時間がありません。送別会は翌日開くことになり，私はたくさんの人が集ってくれるように，祈りながら姉妹たちに連絡をしました。皆それぞれに忙しい人ばかりです。いったい何人の姉妹が来てくれるでしょうか。その晩は不安で，眠れぬまま朝を迎えました。

翌朝，窓を開けると冷たい雨が降っていました。会場は，訪問教師の担当の姉妹が自分の家を提供してくれました。約束の時間になると，ひとりふたりとやって来て，11人もの姉妹たちが集まってくれました。

讃美歌と祈りで会を始め，皆で持ち寄った食事をしたあと，一人一人が順番に話をしました。彼女と出会ったときのこと，心に残る思い出，英語や歌，演劇，料理など豊かな才能を使ってよく責任を果たしてくれたことなど，どの話も愛と思いやりにあふれたものでした。そして最後に彼女の番になりました。彼女は目に涙をためながら，こう言いました。

「きょう，このように，私のために送別会をしてくださってありがとうございます。姉妹たちの愛を心に感じています。私はこの1年間，教会に来ていませんでしたが一度も教会を忘れたことはありませんでした。自分が教会に集わなくなるとは思っていませんでした。何カ月か前から教会に行きたいという気持ちがわいてきました。そんなときに訪問教師の姉妹たちが私の家に来てくださり，話をしてくださいました。おかげで再び教会に行こうという決心がつきました。アメリカに行ったら向こうのワード部に集います。そして，留学を終えたら必ず多摩に帰ってきます。……」

涙があふれて止まりませんでした。一人一人がみたまに満たされ，神様の愛を感じました。天国とはきっとこのような所だと思いました。この教会が真実の教会であることを心より証いたします。(**うたがわ・まゆみ**　1954年生まれ，扶助協会会長)



杉本 ちほ

わたしはピアノをならっています。すごくへたなので神様においのりをしました。「神様，わたしが，いっしょうけんめいピアノの練習をして，じょうずになるようにしてください……。」それからいっしょうけんめいピアノの練習ができました。そして，お父さんやお母さんが，「知らないうちにすごくじょうずになったなー」と言ってくれました。わたしは，神様がおられることを知っています。いつも，わたしたちの言うことを聞いてくださっています。そしてわたしたちのことをみまもってくださっています。(**すぎもと・ちほ**　1978年生まれ)

青少年の活動を通して

杉本 浩彰

ぼくたち多摩ワード部の青少年は今まで，親睦会，クリスマス会，新年会などを企画し，活動してきました。どれも親睦を深めることを第一に考え，食事会やボーリング，スケートなどのスポーツを通して，お互いによく知り合い，いろいろな話をすることができました。また，中学生高校生を問わず，全員参加を目標として，自分たちが成長できるように頑張っています。

若い男性だけの活動としては，教会の郵便ポストを作ったり，聖餐会の若い男性の発表の練習，ワード部のクリスマスパーティーの装飾などを手がけてきましたが，どれもある程度の成果は得られたと思います。

ぼくは教会員の家族に生まれ育ちましたが，教会にはただ何気なく行っていただけでした。中学生になってからは教会のいろいろな点に疑問を持つようになり，クラブ活動と受験勉強を優先し，教会には半分ほどしか行きませんでした。それでも心のどこかでは教会を信じていて，知恵の言葉を守ることやお祈りはしていました。

その後，高校に入ってからは毎週教会に集うようになりました。それは神権会や日曜学校に出席することによって疑問点を少しでも解決していこうと思ったからです。

それからユースカンファレンスの実行委員長の責任をいただき，その責任を通して神様の助けと力を知ることができました。

ぼくはユースカンファレンスを境に周囲の人たちに，自分は教会員であると臆することなく言えるようになりました。自分ではまだまだ証が強いとは思いません。しかし，小さな証でも頑張って育てていこうと思っています。（**すぎもと・ひろあき**　1971年生まれ，祭司定員会会長補佐）

小さな魚たち

杉本 政穂

窓際の小さな魚たち，この夏，越後湯沢の清流でみつけた君たち，朝の陽光の中，夜の灯の下で，2センチの体を動かしている。うん，知らないうちにずいぶん成長したよ。懸命に生きようとするもの

●杉本浩彰兄弟と妹のちほちゃん

に，知らずとも豊かな恵みを与えてくださる神様に感謝します。毎日勇気と励みを与えてくれる君たちに感謝します。名も知らぬ小魚たち。（**すぎもと・まさほ**　1937年生まれ）

数学の問題

津村 麻理子

周りの人は皆できているのに自分だけが数学の問題を解けないとき，くやしさが意地になる場合とあきらめになるふた通りがあるとしたら，私は後者です。

13歳で改宗してから数年間の私の数学の問題は「証とみたま」でした。このふたつのことの意味がわからず，当然感じることもできませんでした。説教台でだれもが口をそろえて「私はこの教会が真実であることを証します」と言うのを聞くたびに腹立たしい思いになりました。それは証やみたまが得られない自分に対する腹立たしさだったと今になって思うのですが，そのときは，それから逃げようとしていました。

まだ幼い私は，「宗教なんてむずかしいことは考えなくていいんだ」と逃避していたのが，だんだん年月がたつにつれ宗教の必要性を認めざるを得なくなりました。その一番の助け手はインスティテュートでした。教師の方が聖典を細部にわたって解説してくださり，少しずつ目が開かれていきました。ある日，心に温かいものを感じ，人の証に同意することができたとき，みたまを感じるとはどういうものであるかを理解できた思いがしました。そのときが私の真の改宗の時だったと思います。

数日後，神殿で死者のための身代わりのバプテスマの水をくぐったとき，自分のバプテスマを受け直したような気持ちがしました。とりあえず，数学の問題が解けたといったところです。神様から花マルがもらえるかどうかは今後にかかっていると今，改めて感じています。（**つむら・まりこ**　1964年生まれ，東京西ステーキ部独身成人評議会副会長）

心のやすらぎ 神殿

津村 由紀子

仕事を終えて，いつものように神殿へと，車を走らせます。毎週金曜日を神殿参入日と決めてからもう2年が過ぎました。国立（くにたち）インターチェンジから外苑を過ぎ，青山通りをまっしぐらに，走り慣れた道を神殿目指してひた走り，夜空に美しく照らし出された神殿の塔の明かりが見えてくるとホッと安心。思わず時計を見ます。「ああ，きょうも間に合って良かった。」

入口のドアを通ると，さっきまで職場で

バタバタと忙しく過ごした時間がまるでうそのように，肉体も霊も一気に清められ，すべてを主にゆだねる心，安らかなひとときを迎えられます。神殿は，いつでもやさしく，温かく私を迎え，主がおられ，私たちを導いてくださることを教えてくれます。

10年前の春，私はキリスト・イエスを受け入れ，主の道を歩き始めましたが，主に根差し，主にあって建てられ，信仰を確立するには，まだまだつたない歩みで，月日ばかりが過ぎてしまいました。それでも神殿で喜びを得，証を強め，決意を新たにすることで，つたない歩みの中でも昇栄に向かっての準備ができればと思っています。

主の日は，夜の盗人のようにやってくるとパウロは繰り返し警告しています。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について感謝しなさい。」（Ⅰテサロニケ5：16―18）主の声を心に聞いて，感謝と喜びをいっぱい積んで，神殿をあとにします。この教会に集えたこと，多くのすばらしい兄弟姉妹に恵まれたことに感謝しています。10年前のバプテスマが幸福への確かな一歩であったことを心から証します。（**つむら・ゆきこ**　1939年生まれ，初等協会教師）

●津村由紀子姉妹（右）と麻理子姉妹

すべての力を尽くして

札幌伝道部専任宣教師　三浦 信一

1982年の春，友人に誘われて初めて教会を訪れた私は，とまどいながら宣教師の握手に笑顔で答えました。それから数回にわたりレッスンを聞きました。そして疑いの中にも彼らの言葉を完全に否定することができなかったのを覚えています。

しかし，私は「バプテスマは受けません」と告げて教会を去りました。

それから数日の間，心が落ち着かず，深く考え，祈りました。そしてある朝，やはりバプテスマを受けなければならないと強く感じ，決心をしました。私を宣教師に引き会わせてくれた友人に心から感謝しています。

1986年3月17日，JMTC（日本宣教師訓練センター）を経て専任宣教師として北海道に赴任し，数えきれないほどのすばらしい経験をしました。神様からいただいている肉体と自由意志を正しく管理して，正しい思いで全力を尽くすときにだけ主の助けがあり，奇跡を，ときには肉眼でときには霊の眼で，見ることができると知りました。

昨年の11月，同僚と私が伝道本部から岩見沢，滝川の地域を訪問したときのことでした。札幌では雪が降っていませんでしたので，私たちはマフラー，耳かけ，帽子などは何も持たず，長靴だけを持って汽車に乗りました。しかし，着いた所は猛吹雪で，雪はほとんど地面と平行に吹きつけていました。同僚と私は，みたまに促され，街頭伝道をする決心をしました。皆さんはそんな天候の中では街頭で伝道はできないと思われるでしょうか。モルモン経をだれにも渡すことはできないと思われるでしょうか。求道者を見つけるのは無理だと思われるでしょうか。もし，できないと思う自分が心のステージにうつむいて登場するならば，絶対にそれは無理でしょう。しかし，できると思う自分がそこに登場するならば，そしてそれが主のみこころであるならば，必ず達成できるのです。どのような自分を登場させるかは自由意志にかかってきます。

私たちは目標を決め，祈ってからアパートを出ました。街に人影はほとんど見当たりませんでした。たまに通りかかる人も，皆足ばやに去っていきます。私の眼鏡には雪が吹きつけ前を良く見ることができません。そんな中，同僚と私はただひたすら笑顔で，元気に，声をかけます。寒いなどと考える瞬間はないのです。主を信じ，主の熱いみたまとともに，必死に，すべての力を尽くすのです。過ぎゆく時さえも忘れるほどです。そんなときほど主の愛を強く感じるときはありません。約5時間ほどでしたが，同僚と共に8人の方にモルモン経を渡し，5人の方とレッスンの約束をすることができました。もちろん数ではありませんが，主と共に働くことによりもたらされるこのような喜びはたとえようがありません。

また，このようなこともありました。同僚が代わり，私は期待に胸をいっぱいにしたアメリカから来たばかりの宣教師と一緒に伝道することになりました。手稲（ていね）で伝道を始めた第一日目，以前からレッスンをしていた女性に5番目のレッスンを行ないました。同僚はまだそこまでは勉強しておらず，私がほとんどのレッスンを行なうことになりました。私が一生懸命に語っている間，同僚はその言葉に全力で耳を傾けているようでした。あるいは心の中で祈っていたのかもしれません。私はレッスンの最後にそれまで沈黙を保ち続けてきた同僚に証をしてくれるように頼みました。彼は片言の日本語でとてもゆっくり，そして考えながら語りました。「神様は生きています。ジョセフ・スミスは神様とイエス・キリストに会いました。戒めは大切です。」そのときです。あふれんばかりの主のみたまが注が

れたのは。彼の証は確かに日本語としてはなめらかではなく上手ではなかったでしょう。しかし，彼の持てるすべてを尽くしてこの短い証を心から語ったのです。

求道者の目から涙があふれました。とてもすばらしい瞬間でした。それは確かに主のみたまが彼の言葉の能力を超えたところで働き，彼女にみたまの力を感じさせたのです。後日，彼女はすべての戒めに従い，生活を改め，大きな証を持ってバプテスマの水をくぐりました。

主の僕として働かせていただけることに心から感謝しています。私はとても弱く未熟で，取るに足らない者ですが，福音によって生活を変え，イエス・キリストによって生まれ変わる人々をたくさん目にしてきました。福音が真実であること，伝道が確かに主のみ業であることを証します。（**みうら・しんいち**　1962年生まれ，横浜ステーキ部上大岡ワード部，本年３月に帰還）

――モルモン経かるた――

い のりたる心よみして
許しあり
父に従い義の道あゆむ

イノス1:1-13

ろ んせずにおもいおこせよ
聖きふみ
「イエス・キリスト」
御名をうくべし

IIIニーファイ27:3-5

は なたれし矢もサムエルを
そこなわず
城壁（かべ）の上にてみ言葉伝う

ヒラマン13:3-5
16:2,3

大阪北ステーキ部豊中東ワード部の阪本晴子姉妹は，モルモン経の内容に基づいて48首の歌を作られました。その中から3首をご紹介します。

新役員の聖任〔任命〕

１月21日から２月20日までに管理本部会員記録統計課に通知のあった役員の異動（敬称略）

●盛岡地方部盛岡支部
新支部長：勝政英人（前任者：山川卓）
●横浜ステーキ部横浜第１ワード部
新監督：田口実康（前任者：塩　隆彦）
●横浜ステーキ部川崎ワード部
新監督：芹沢　正（前任者：武田敏男）
●横浜ステーキ部大船ワード部
新監督：小山　清（前任者：岩波信夫）
●熊本地方部大牟田支部
新支部長：宮瀬英都（前任者：石坂桂一郎）

渋谷ブックセンターからのお知らせ

メルケゼデク神権者用個人学習ガイド補足資料1988

「キリストに来る様すべての人々を勧誘すべきなり」

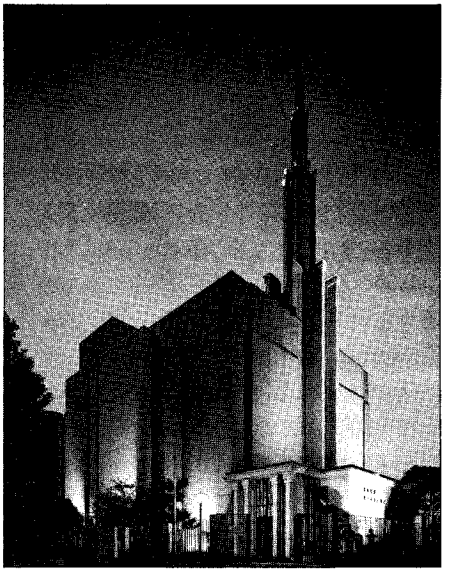
「教会の使命」をさらによく理解し達成するための，個人学習ガイド補足資料であり，すべてのメルケゼデク神権者が使用するように指示されているものです。

PBMP0247JA　価格：30円

東京神殿ポスター（新）

東京神殿の新しいポスターが３月から発売されています。従来のものは絶版となりました。

VVIP1450JA（カラー　325×245㎜）価格：50円



❶月に召されたJMTC第104期生12人の名簿

S：ステーキ部，D：地方部，W：ワード部，B：支部

後列左から1～7
前列左から8～12

〈名　前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉	〈名　前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1.岸岡庸之	岡山S／岡山西W	東京南伝道部	7.橘　美樹	盛岡D／北上B	大阪伝道部
2.池田弘樹	横浜S／横浜第2W	神戸伝道部	8.藤本美和	神戸S／加古川W	東京南伝道部
3.奥村浩子	名古屋西S／一宮W	福岡伝道部	9.中村田鶴	大阪北S／城陽B	札幌伝道部
4.今井美智	東京北S／豊島W	大阪伝道部	10.藤中京子	広島S／広島光W	仙台伝道部
5.鈴木恵美	町田S／町田第1W	名古屋伝道部	11.宮原みどり	神戸S／明石W	東京南伝道部
6.柳沼ゆかり	仙台S／福島W	神戸伝道部	12.鈴木聖美	神戸S／加古川W	福岡伝道部

元福岡伝道部伝道部長

タカシ・C・清水長老逝去

去る2月14日（日），元福岡伝道部伝道部長（1982—85年）タカシ・C・清水長老が心臓発作のためカリフォルニア・パームスプリングスのアイゼンハワー病院で逝去された。62歳。

編集室から

《原稿を募集しています》

▶各地のたよりの原稿を常時募集しています　改宗談や日々の信仰生活で得た証（仕事にかかわる証など），本誌を読まれての感想文（「読者のひろば」）やカットなどをお送りください　また，北は北海道から南は沖縄までの幅広い話題を取りあげたく思いますので，広報ディレクターあるいは各種催し物を担当する高等評議員，地方部評議員の方はレポーターを手配してくださるようお願いします

▶来年7月号掲載分の締切は5月2日（必着）です　投稿には必ず連絡先（電話番号）と教会での責任（役職名），生年月日を記入してください　お送りいただいた原稿は一部手直しすることがあります

▶各地の行事や催しに関する記事は，できるだけ早めにお送りください

▶ワード部／支部特集への投稿を希望される方は，編集室へ直接お電話ください　必要な資料をお送りいたします

▶小学生・中学生の方の詩の特集を企画しております　どのような作品でも結構ですご応募お待ちしております

▶あて先：〒106東京都港区南麻布5-10-30末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室　☎03（444）5264

聖徒の道 1988年4月20日発行（毎月1回20日発行）第32巻第4号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

イエスの上って行かれるとき，彼らが天を見つめていると，見よ，白い衣を着たふたりの人が，彼らのそばに立っていて言った，「ガリラヤの人たちよ，なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは，天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で，またおいでになるであろう。」
（使徒行伝1：10－11）